Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

浄土教関係疑経典の研究 (二)

柴　田　　泰

目　　次

問題の所在
〈資料篇〉……前号
〈研究篇〉
第一章　資料の整理……75
第一節　資　料〈一覧表〉……75
第二節　出典別特徴並びに補遺……80
第二章　資料の取扱い（研究方法）……84
第三章　成立・写経年代……86
第一節　疑経典の成立・写経年代概観……86
第二節　浄土教関係疑経典の成立・写経年代…90
要　　結……96
第四章　思想形態……98
第一節　浄土教関係経論の思想形態概観……98
第二節　中国浄土教の思想形態概観……102
第三節　疑経典の思想形態概観……106
第四節　浄土教関係疑経典の思想形態……108
第一項　〈一覧表〉よりみた全体的特徴……108
第二項　各疑経典の浄土思想……113
第三項　疑経典独自の浄土思想……120
要　　結……126
結　　論……127

〈資料篇〉においては、今日予想されうる浄土教に関係する広義の疑経典について、大正蔵経、続蔵経、敦煌文献などの中から検索し、その一々について従来の諸研究に導びかれながら可能なかぎり考証した。

〈研究篇〉においては、〈資料篇〉において取扱った疑経典を基礎資料として、それらの成立、思想、変遷などを考察することにより、浄土教関係疑経典に関する諸様相、ひいては浄土教に関する新たな隠された実態を明らかにし考究することを意図したい。

〈研　究　篇〉

第一章　資料の整理

第一節　資料〈一覧表〉

〈資料篇〉において取扱った浄土教関係疑経典を前にして、まずわれわれが最初になさねばならない作業としては、後の諸研究の遂行を容易にするために、〈資料篇〉において可能なかぎり考証した疑経典を逆に総合し整理することであり、併せて〈資料篇〉においては紙数の制限により論及できなかった一、二の問題について補足することであろう。

本節においては、〈資料篇〉であまりにも細かくなりすぎた浄土教関係疑経典の総合的全体的性格を明らかにするために、その要点を〈一覧表〉として再構成しよう。〈資料篇〉で取扱った経典、仏名・国土名・関係用語、典拠を従来の形式[1]に倣って挙げると以下の通りである。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

浄土教関係疑経典〈一覧表〉

経典名	仏名・仏国土名など	出典個所
浄土思想と見做された真経		
原語の異なる経典		
大乗無量寿宗要経	無量寿	S.2078etc.230部、P.29部、散18部
大乗無量寿経　法成（？）	無量寿	大正19・82上以下
成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌　唐不空	無量寿	大正19・596中
大乗聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経　宋法天	無量寿	大正19・85上以下
無量寿大智陀羅尼　宋法賢	阿波哩弥多喻	大正21・907中
原語の疑わしい経典		
菩薩道樹経　（私呵昧経）　呉支謙	安隠国　寿無極法王	大正14・813上
陀隣尼鉢経　東晋曇無蘭	阿弥陀法（普言無量光明）	大正21・865中
菩薩蔵経　梁僧伽婆羅	西方跋陀羅世界（此間）於彼有仏名無辺光明	大正24・1087上
最勝仏頂陀羅尼浄除業障呪経　唐地婆訶羅	阿嚂唎多	大正19・359中
無量寿仏化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法　唐金剛智	西方念誦法　帰命無量寿	大正21・130上以下
観自在如意輪菩薩瑜伽法要　唐金剛智	無量光	大正20・214下
百千頌大集経地蔵菩薩請問法身讃　唐不空	無量寿	大正13・792下
蓮華部心念誦儀軌	無量寿	大正18・322中
浄土思想と解釈された経典		
木槵子経　失訳人今附東晋録	称仏陀達摩僧伽名	大正17・726上
文殊師利所説摩訶般若波羅蜜経　梁曼陀羅仙	繋心一仏、専称名字、至心念仏	大正８・731上中
大集経日蔵分　隋那連提耶舎		大正13・285下
中国撰述浄土教関係疑経典		
現存疑経典		
1．浄土思想を主要とした経典		
山海慧菩薩経（阿弥陀仏覚諸大衆観身経）	阿弥陀	大正85・1405上
十往生経（十往生阿弥陀仏国経）	阿弥陀、極楽	卐続１・87・４
阿弥陀仏説呪	阿弭多婆弥陀	大正12・352上中
無量寿仏説往生浄土呪	無量寿 阿弥多婆 阿弥陀	大正12・348中
念仏超脱輪迴捷径経	阿弥陀	卐続１・87・４
極楽願文　達喇嘛嘎卜楚薩木丹達爾吉訳	無量寿、弥陀、阿弥陀極楽	大正19・80中以下
2．一部に浄土思想の認められる疑経典		
灌頂百結神王護身呪経　（灌頂経巻四）　東晋帛尸梨蜜多羅	往生西方	大正21・507下

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

灌頂随願往生十方浄土経　（灌頂経巻十一、普広経）	阿弥陀	大正21・529下
灌頂抜除過罪生死得度経　（灌頂経巻十二、灌頂章句抜除過罪得度経）	無量寿 阿弥陀	大正21・533上、中下
観世音三昧経	無量寿	京都博物館蔵守屋本
護身命経　（救護身命経済人疾病苦厄）	無量寿	大正85・1326上
救疾経	無量寿	大正85・1362下
観　経	無量寿 阿弥陀	大正85・1461上～下
普賢菩薩説証明経	阿弥陀 無量寿	大正85・1363下、1365上、1368上
太子讃	弥陀	S.2204
大通方広懺悔滅罪荘厳成仏経	阿弥陀 無量寿 無量光 *『無量寿経』過去仏、十二光仏、十三仏	大正85・1341中、下、1342上、1343上、下、1350中、1354下
現在十方千五百仏名並雑仏同号	無量寿 阿弥陀 * 六方三十八仏、出阿弥陀讃一切諸仏所持之法経	大正85・1447中～1448中
仏名経（三十巻本）	*『無量寿経』尊者、過去仏、十二光仏、十三仏	大正14・239中、243下、244中、258上中、271中
究竟大悲経	安楽	大正85・1372上
高王観世音経	(阿)弥陀	大正85・1425中
続命経	阿弥陀	大正85・1405上
無量大慈教経	極楽 阿弥陀 楽生西方国	S.6961
大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞厳経　唐般刺蜜帝	無量光、超日月光 弥陀 阿弥陀婆 無量寿	大正19・128上中、133中、134上、139中
三厨経　西国婆羅門達多羅及闍那崛多等奉詔訳	阿弥陀 無量寿	大正85・1413下、1414上
勧善経	阿弥陀	大正85・1462上
新菩薩経	阿弥陀	大正85・1462上中
地蔵菩薩経	極楽	大正85・1455下
救苦観世音経	無量寿 願往生	S.4456

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品	阿弥陀 弥陀 極楽	大正85・1455上中
普賢菩薩行願王経	阿弥陀 弥陀 極楽	大正85・1453下—1454上
青頸観自在菩薩心陀羅尼経　唐不空注	無量寿	大正20・490中
金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法　唐金剛智	観自在王 阿密嘝覩 無量光	大正19・75上、76下、77上
大乗瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経 唐不空	観自在王 無量寿 極楽 弥陀 阿弥陀	大正20・726上、735中、741下、742上中下
観世音不空羂索王心神咒功徳法門名不空成就法	極楽 阿弥陀	S．232
北方大聖毗沙門天王経	阿弥陀 阿弥陀婆	S．5560
大仏頂如来頂髻白蓋陀羅尼神咒経	阿弥陀 極楽	S．4637
消災除横灌頂延命真言経	極楽	S．2037、2095
相好経	阿弥陀	S．22、4678
古佚経		
善王皇帝尊経	阿弥陀	『安楽集』巻下(大正47・20中)
惟務三昧経	念仏修戒	『安楽集』巻下(大正47・16上)
目連所問経	無量寿	『安楽集』巻上(大正47・14上)
善信磨祝経	西方安隠清浄法国 阿弥陀	『経律異相』巻三十八(大正53・205上～下)
須弥四域経	阿弥陀	『安楽集』巻下(大正47・18中)
須弥像図山経	阿弥陀	『弁正論』巻五(大正52・521中)
十二遊経	阿弥陀	『弁正論』巻五(大正52・521中)
空行三昧経	弥陀	『法苑珠林』巻十一(大正53・369下)
優塡王作仏形像経	無量寿	『諸経要集』巻八(大正54・76中) 『法苑珠林』巻三十三(大正53・540下)
弥勒所問経	阿弥陀 安楽 十念	『遊心安楽道』元暁撰(大正47・114下)

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

経録に依る経典		
舎利弗生西方経		出三蔵記集巻四
生西方斎経		〃
浄土経典と見做された疑経典		
浄度三昧経	* 受持斎戒、善神護念	卍続1・87・4 S.4546、5960、2301
占察善悪業報経　菩提登訳	仏之名字、専意誦念	大正17・908下～909上
預修十王生七経　（閻羅王授記合四衆逆修生七斎功徳往生浄土経、十王生七経）	* 念阿弥陀仏	卍続2乙・23・4
守護国界経	念仏持戒	『楽邦文類』巻一（大正47・161上）
日本撰述浄土教関係疑経典		
観世音菩薩往生本縁経　（往生浄土本縁経、浄土本縁経）　失訳人今附西晋録	極楽 阿弥陀	卍続1・87・4
九品往生阿弥陀三摩地集陀羅尼経　唐不空	阿弥陀 無量寿 九品浄土 十二光仏	竜谷大学図書館蔵
無量寿如来至真等正覚経　東晋法力	無量寿 阿弥陀 安楽 極楽 * 高声念仏	竜谷大学図書館蔵
無量寿仏名号利益大事因縁経　曹魏康僧鎧	無量寿 不可思議光 清浄安楽	卍続1・1・4
阿弥陀仏根本秘密神呪経　曹魏菩提流支	*『阿弥陀経』 *『抜一切業障根本往生極楽浄土神呪』	卍続1・3・5
阿弥陀三昧海経　宋元嘉中畺良耶舎	阿弥陀 弥陀 無量寿	竜谷大学図書館蔵
地蔵菩薩発心因縁十王経（発心因縁十王経、地蔵十王経）	阿弥陀	卍続2乙・23・4
妙法蓮華三昧秘密三摩耶経　不空訳	弥陀	卍続1・3・5
馬鳴菩薩成就悉地念誦　不空訳 吉備大臣持来	極楽	卍続1・3・5
大梵天王問仏決疑経　一巻	阿弥陀 本願力 無量寿 極楽	卍続1・87・4
因果得道経	善導 弥陀	『浄土宗要集』第一見聞第一　良栄述（『浄全』巻十一、p.222）
浄土阿弥陀経		『長西録』

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

四十八願阿弥陀経　阿地瞿多		『長西録』
無量寿〔経〕浄土阿弥陀経		『長西録』

すでにしばしば指摘したように、今日浄土思想に言及する経論を網羅したものが藤田宏達博士〈一覧表〉であるとしたら、そこに本表を加えることによって、とくに中国浄土教を研究する場合の一切の漢訳浄土教関係経論がことごとく収められたことになるであろう。

問題の所在において述べた最初の意図、すなわち浄土教に関係する疑経典のすべてを取上げるという第一の主題はこれでなし終ったといえるであろう。

(1) 矢吹慶輝博士「漢訳浄土経論表」(『阿弥陀仏の研究』附録五、pp. 449—474) では、

経名・南条目録番号・訳者・訳者生国・年時(主として訳経の)・説林丁数・縮刷蔵経丁数・仏名{阿弥陀 無量 阿弥陀夜 無量寿 阿弥陀婆 無量光 清浄光}・土名{須摩提 須阿摩提 蘇阿摩帝 安楽 清浄 楽 無量寿}・阿弥陀仏と一類とせらるる仏陀。

藤田宏達博士「浄土思想に言及する経論〈一覧表〉」(『原始浄土思想の研究』pp.136—164) では、

通し番号・経名・〔時代〕訳者・漢訳異本・サンスクリット本・チベット訳東北目録・大谷目録・仏名・仏土名・『大正蔵』巻・頁。

の形式で表わされている。〈資料篇〉pp. 110—111参照。

本表がそれらと異なる点は、疑経典という性格上、『説林』・異本・サンスクリット本・チベット訳との関係は皆無であり、記載の順序が一応の目安で古い方から挙げたが査定は困難なことにある。ここでは、〈資料篇〉で取扱った経典の索引の意味も含めて記述の順序に従って列挙した。また従来の形式では、仏名・仏土名・関係用語は独立の項目で表わされていたが、本表では一項に含めて挙げた。その理由については第四章第四節第二項(pp.116-120) で諒解されるであろう。

第二節　出典別特徴並びに補遺

本節では、〈資料篇〉から前節〈一覧表〉までの資料の検索・分類・考証・整理の過程で見出し、〈資料篇〉において指摘できなかった二、三の問題について考えてみる。

その第一は、〈資料篇〉の最初に取上げた関係資料の中でも[1]、第一に問題とし、そのすべてを負うている大正蔵経、続蔵経、敦煌文献などの出典別整理とその特徴である。そこでそれを容易に知るために出典別総数を図式化すると次のようになるであろう。

浄土教関係疑経典出典別一覧[2]

		大正蔵経	続蔵経	敦煌文献	その他
※真　経					
原語の異なる経典	5				
原語の疑わしい経典	8				
浄土思想と解釈された経典	3				
疑経典					
中国撰述					
現存疑経典					
浄土思想を主要とした疑経典	6	2	2	2	
一部に浄土思想の認められる疑経典	32 (1)	7	2	22	2
古佚経	10				
経録による経典	2				
浄土経典と見做された疑経典	5 (1)	1	2	1	1
日本撰述					
現存疑経典	10		7		3
古佚経	1				
経録による疑経典	3				

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

本表の大まかな特徴を各疑経典の具体的内容を勘案して指摘すると、まず、大正蔵経に収められた疑経典については、第一に日本撰述に属する経典が無いという点が挙げられる。[3] 第二に『灌頂百結神王護身呪経』『仏名経』三十巻などのように浄土思想に関しては附加・改変的な傾向が認められる。第三に、その中の密教経典をみると、浄土思想と見做された経典の性格が強く、このことは浄土思想と見做された真経の中では比較的多い密教経典と共通の性格を有することが知られる。これらの特徴から帰着することは、全くの偽経、或いは疑経的要素が少ないという点であり、今日われわれが用いる最も権威ある大正蔵経であってみれば当然のことといえよう。　続蔵経所収の疑経典については、まず第一に日本撰述のものが非常に多いことが注意される。　大正蔵経所収の日本撰述疑経典が皆無であることからの当然の特徴であるが、このことは図表を縦に比較した続蔵経所収の割り合いでそうであると同時に、横に比較した日本撰述現存疑経典の場合では、当然のことながらその他に含めた竜谷大学図書館蔵の三経[4] を除いて、すべて続蔵経に依存している。しかもそれら日本撰述浄土教関係疑経典の特徴としては、浄土思想を主要として構成された疑経典が多いことであり、他の疑経典も含めて思想的には一読して〈浄土三部経〉の影響が顕著である。これらの思想的特徴については別に指摘されるであろう。[5] 第二に数少ない中国撰述と思われる疑経典については、『念仏超脱輪廻捷径経』を『竜舒浄土文』の讃文・念誦法の別行経として除外すれば、他はいずれも敦煌写経と密接な係わりを有している。その中の『十往生経』『浄度三昧経』などについてはすでに研究がなされているが、[6] それらは敦煌文献との比較研究により、疑経典の流布・変遷を考える上で重要な資料となるであろう。　敦煌文献について言えば、現存疑経典のうちでその一部に浄土思想の認められる経典が圧倒的に多い。更に続蔵経所収の関係写経を含めると、浄土教関係疑経典の資料としては不可欠の存在であることが知られる。とくにそれらの多くは従来の中国浄土教の研究においてはそれ程論及されていなかったのであり、これらの解明は中国浄土教について新たな諸様相を提示してくれるであろう。敦煌文献には未だ多くの査定出来ない不明断片があり、本稿でも浄土思想に言及する大正蔵未収経の数点を指摘したが、浄土教に関係する讃文・祈禱文の研究[7]を含めてなお残された課題は多い。

以上が資料の出典別整理とその大まかな特徴である。

第二に指摘する問題は、〈資料篇〉で取上げた以外の、本稿では意図的に削除した経典についてである。それらは浄土思想とまぎらわしい訳語、浄土教徒に依用されたが明確な出典個所が示されない経典など、すでに註などで指摘した経典も含まれる。もとよりこうした経典をわざわざ取上げる必要もないであろうが、本稿で取上げた経典の中にも訂正、補訂を要する経典があるとしたら、同様になお新たに加えるべき経典も予想されるわけであり、そのためにも今後の参考として記しておこう。

『仏性海蔵智慧解脱破心相経』

「安楽国」（大正85・1400上）

『仏為心王菩薩説投陀経』

「世有極楽」（大正85・1403中）

『譬喩経』

「専意念仏持戒焼香」（『安楽集』巻下、大正47・16上）

『菴羅女経』『弘猛海慧経』『地蔵十輪経』『華手経』

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

などが考えられよう。[8] また、本稿においては、浄土教に関係する所依の経典ということを自明の前提として考えてきたが、逆に浄土教を破するために経典が依用された事例も留意すべきである。内藤竜雄氏の論考を通して知られる「敦煌ペリオ本三八四八号残缺経典目録」[9]には、

仏蔵経四巻　明破西方浄土卅六本大願処の経目・総義が「解題」を附して認められるという。『仏蔵経』三巻（羅什訳）には何らの問題も無く、[10] 浄土思想に言及されていない。しかし、こうした経典が浄土教批判の依りどころとして扱われているという事例は、浄土教の側に立って肯定的資料のみを扱い、また、そのように解釈しがちなわれわれに対して、中国仏教全体という大局的視野で浄土教関係経典をとらえていかねばならないことを警告している。

第三は、敦煌文献検索において見出した何点かの写本の問題がある。その第一は浄土教関係経典摘出の手がかりとして、スタイン本に限り、L. Giles: Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum, London 1957、王重民『敦煌遺書総目索引』の題名不明の経典についてすべてに当ったのであるが、その際浄土思想に言及する題名不明の写本を逆に〈一覧表〉と照合することによって何点かの経典が査定できる。ここに本稿でも取扱った疑経典を含めて判明した敦煌写経と浄土思想に言及する出典個所を挙げておこう。

S 1018、4308、4559『無量大慈教経』
　Giles. No. 5479、5482、5484、Unidentified apocryphal sūtras.
　『敦煌遺書総目索引』「仏経」[11]

S 1487『普賢菩薩行願王経』
　Giles. No. 4382、Unidentified Works, Sūtras.

S 1726『無量大慈教経』
　Giles. No. 4385、Unidentified Works, Sūtras.

S 2260『大智度論』巻一〇、羅什訳（大正25・134中）
　Giles. No. 4395、Unidentified Works, Sūtras.

S 2758『金光明最勝王経』義浄訳（大正16・416上）
　Giles. No. 5229、Apocryphal Sūtras. ※「写経名　金光明微妙経」

S 3432『十一面神咒心経』玄奘訳（大正20・152中）
　Giles. No. 4504、Unidentified Works, Dhāraṇī Sūtras.

S 4156『無垢浄光大陀羅尼経』弥陀山訳（大正19・718下）
　Giles. No. 4508、Unidentified Works, Dhāranī Sūtras.

S 4278『観無量寿経』畺良耶舎訳（大正12・345中以下、首欠　中品上生者以降　尾欠）
　Giles. No. 5159、Other Uncanonical Sūtras. ※「写経名観極楽国土無量寿仏観」

S 4519『維摩詰所説経』羅什訳（大正14・548中）
　Giles. No. 4452、Unidentified Works, Sūtras.

S 4539『金光明最勝王経』義浄訳（大正16・416上）
　Giles. No. 4454、Unidentified Works, Sūtras.

S 5768『千手千眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』伽梵達摩訳（大正20・107上）
　Giles. No. 4599、Unidentified Works, Other Buddhist Texts.

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

『敦煌遺書総目索引』「大悲神咒」

などがそうである。これらはその全体からみれば極めて数が少ないが、その中には僅か一葉数行の断片（たとえば『普賢菩薩行願王経』）、大部な経典（たとえば『大智度論』など）のたった一個所の浄土思想を手がかりとしてその写本が判明するのであり、余程著名な経論を除いて査定できない不明断片に対して確実な手がかりを与えてくれる。浄土思想に言及する関係経論の多いことは、それだけにその完全な〈一覧表〉の作成がこうした点でも一助の役割を有しているといえよう。

次に、王重民『敦煌遺書総目索引』では経題の欠けている写本には「仏経」、経題が記されている場合にはその正否にかかわらずそのまま挙げられている。従ってわれわれはその一々を確認して用いなければ非常な誤りを犯すことになるが、とくに〈浄土三部経〉に関して気づいた何点かを指摘しておこう(12)。

『仏説無量寿経』S 290、324、1660、2372、3913、4937 ⇨『大乗無量寿宗要経』

『仏経』S 927、4518 ⇨『無量寿経』

『仏経』S 3478 ⇨『無量寿如来会　本願文』

『阿弥陀経』巻下　S 5058 ⇨『大阿弥陀経』

『仏経』S 1703、1783、1950、1956、2971、4193、4404 ⇨『観無量寿経』

『薬師雑抄』S 2544（Giles. No. 2421、Verso (1) Amitāyus dhyāna sūtra　浄土西辺）⇨『観無量寿経』断片

『大無量寿経』S 3695 ⇨『観無量寿経』

『仏経』S 4278（前出）

『仏経』S 2171、3027、5337 ⇨『阿弥陀経』

※『金光明経』S 2164 ⇨『仏名経』

以上が敦煌スタイン本における内容の判明した写本、訂正を要する目録の経名である。そしてこのことは、未整理の部分を多く有する厖大な敦煌文献に関して、なお査定可能な多くの写本の存在を予想させるし、また目録によって査定された写本の中にも多くの訂正を必要とする部分が残されていることを物語っている。敦煌文献に関しては、その歴史も浅く、未だ基礎的資料研究の余地が残されており、かつての諸先覚がそうであったようにその一つ一つに根気よく忍耐強く当って考証していく以外に方法がないのであろう。

以上が浄土教関係疑経典の検索、分類、考証、そして整理の過程において認めた浄土思想に関係する諸点である。

(1)　〈資料篇〉pp. 100—102.

(2)　本表での（　）内の数字は、『大通方広経』巻上㊀敦煌本、巻下㊀知恩院蔵写本、『浄度三昧経』巻第一続蔵経、巻中・巻下敦煌本による。

また、前出〈一覧表〉の出典個所で大正蔵経、続蔵経と挙げてもその原本が敦煌文献（とくに大正蔵経第八十五巻所収の敦煌本）、その他の場合には原本に従った。

(3)　〈大正蔵経〉経部までに収められた経典で日本撰述疑経典として取上げたものに『九品往生三摩地集陀羅尼経』不空訳（大正19・79中—80上、〈資料篇〉pp. 141—142）がある。しかしその原本は「長谷寺蔵本」であり、本稿では「竜谷大学図書館蔵本」としたので異論はないであろう。なお当該本について〈資料篇〉では牧田諦亮博士の論稿（「松誉厳的の疑経観」附載、『惠谷先生古稀記念浄土教の思想と文化』）に依ったが、その後当該本（竜谷大学図書館No.241. 5、248、1。No.215. 1、37、1）を披見した。高配をいただいた竜谷大学助教授岡亮二先生に謝意を表する。

(4)　就中、『九品往生陀羅尼経』は卍続1・3・3にも収められている。前註(3)参照。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

(5) 第四章第四節第一項参照。

(6) たとえば、佐藤成順 大南竜昇「十往生経の研究」(『三康文化研究所年報』第三号)、牧田諦亮「浄度三昧経とその燉煌本」(『仏教大学研究紀要』第37号)など。

(7) 〈資料篇〉pp.101—102. 本号第四章第四節第三項 pp.123—124、126参照。

(8) 就中、古佚経、浄土思想と解釈された経典の削除の理由については〈資料篇〉pp.102、104参照。

(9) 内藤竜雄「敦煌ペリオ本三八四八号残缺経典目録について—北宋における浄土、禅批判を含む一文献—」(『印仏研』第17巻第1号)。ただし、当該写本については確認していない。

『敦煌遺書総目索引』(p.296)では、

3848 此当是劉宋時衆経別録

毎経目下、有総義一句、謂明某某、次解題、較詳盡。

総義用朱筆、解題用墨筆。唐写本、書法佳。存一〇九行。

と解説する。

(10) 出2、法5、歴8、静1、内3、6、9、武6、13、開4、12、19。

(11) 以降の敦煌写経に対して『敦煌遺書総目索引』ではいずれも「仏経」としてあるので一々記さない。とくに別な記述に限っては挙げることにする。

(12) ジャイルズの目録ではおおむね正しい査定をしており、ここでは挙げない。

第二章 資料の取扱い(研究方法)

前章において、浄土教関係疑経典の資料に関する整理、補足すべき諸事項はなしおえたと思われる。そこでわれわれは以降に続く第二の課題として、とくに中国浄土教の分野ではおそらく一つの特異な様相を示すであろう思想研究に立ち入らねばならない。

そこで本章では、ほぼ予想されうる一切の資料を前にして、そこに認められる思想形態などを問題とする場合、どの資料に一番のウエイトを置き、その中でもどの疑経典を主要とするかという諸資料の取扱い、方法の規定について考えておこう。

本稿において取扱った諸経典は、前号〈資料篇〉「第三章 浄土教関係疑経典の分類」[1]において大別したように、

第一 浄土思想と見做された真経

第二 中国撰述浄土教関係疑経典

第三 日本撰述浄土教関係疑経典

に分けられる。

就中、第一の浄土思想と見做された経典の要点としては、従来〈漢訳浄土経論〉或いは〈浄土思想に言及する関係経論〉の概念が"阿弥陀仏、極楽などの用語に言及する経論"と考えられていることになお配慮しなければならない余地を有する点である。その第1は訳語の問題がある。われわれは阿弥陀、極楽の原語として Amitāyus, Amitābha, Sukhāvatī を考えればよいが、[2]しかしその訳語がすべて正しくなされたとは限らず、とくに仏名に関しては「甘露」と訳される事例もあるという点である。[3]このことはインド浄土教の関係資料として原本の無い漢訳経典を取扱う場合にも、厳密には考慮しなければならないことを意味している。更に中国以降に限っていえば、逆に無量寿、無量光などの訳語はその原語が何であれ、阿弥陀仏と解される可能性の強いことも前号で具体的に取り上げたとおりである。第2は、ただ単に阿弥陀仏、極楽の語が認められるだけで浄土思想と見做すことの問題である。とくに中国浄土教徒に重く用いられた経典としては、浄土教の主要な要因

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

たる〈往生〉、〈念仏〉と関係する他仏浄土への往生、他の諸仏に対する念仏の思想も非常に重要な依りどころとして係わっている。浄土教関係経典には、往生思想、念仏思想に言及する経典も必要となるであろう。第一の浄土思想と見做された経典は、いずれもそうした意味では（正しくは浄土思想の疑わしい経典という意味で）、浄土教に関係する経典であり、資料としてはそれなりの摘出理由が認められよう。しかしながら、それではこうした経典が思想研究において欠くことのできない資料であるかといえば、必ずしもその要はない。何故ならこれらはすでに藤田宏達博士によって指摘された〈浄土思想に言及する経論〉の分野に収まる性格のものであり、真経に認められる思想研究として別に考究せねばならないものであろう。

そこで必然的にわれわれが思想研究を遂行する場合の基礎的資料となるのは、第二の中国撰述浄土教関係疑経典、第三の日本撰述浄土教関係疑経典であることに帰着する。しかしながら、この場合にも中国撰述と日本撰述とではその性格が著しく異なり、同等に扱えないことに容易に気づくであろう。思想研究という課題を前にして、われわれが常識的に予想する内容としては、夫々の疑経典が何時頃成立し、どのような思想を説き、それらがどう伝えられたか、という成立年代、思想形態、流布変遷の問題であるが、それを中国撰述、日本撰述に適応させて考えてみても、明らかに両者は異質の要素を有していることを認めざるを得ない。まず最も重要な思想形態は、疑経典特有の社会背景を考慮しないで、それぞれの諸相を指摘することにより譲歩できても、その成立、変遷に少なくとも日本撰述疑経典は大きな難点を有している。それを考える場合の決め手として、われわれは経録、諸典籍の引用等によらねばならないが、それにはあまりにも資料の乏しいことに気づくであろう。加之、最も決定的な違いは、浄土教史上での疑経典が占める比重の問題である。日本浄土教を考える場合、上代の浄土教を措くとしても、鎌倉以降の浄土教は浄土宗、浄土真宗が圧倒的比重を占めて今日に至っている。そうした中で創作され今日に残された疑経典の価値は、それなりに注目に値するにしても、社会全体の中での占める位置としてはそれ程大きく認めることはできないであろう。思想形態についていえば、その内容にしても仮託された訳者をみても、〈浄土三部経〉の影響を受けていることが一目瞭然であるが、浄土宗、浄土真宗の大きな流れの中ではやはり正依となり難い点では副次的資料と見做さねばならない。[4]

そこで最後に残された中国撰述浄土教関係疑経典が本稿における主要な第一資料として浮び上ってくる。これらの思想研究は少なくとも日本撰述の有した難点を認めさせない。第1の経録、諸典籍を通して知られる成立、変遷についてであるが、そのすべてに信を置き難いにしても、日本浄土教に比して豊富であることを、〈資料篇〉「第二章　関係資料と諸研究」で認めたであろう。更に加えて敦煌文献の写経年代の記録はその数が少ないにしてもわれわれに確かな手がかりを与えてくれるし、日本浄土教典籍の引文も必要に応じて参考になる。第2の、そして最も重要な中国浄土教史上の位置づけに関しても、後に知られるように、[5]日本浄土教に継承された〈称名念仏〉以外の様々な行業がなされたのであり、そうした中国浄土教の多様性という特徴の流れの中での、しかも数多く創作された疑経典の中でも大きな比重を占める浄土教関係疑経典こそ、まさしく研究に値する資料と思われる。

以下の研究においては、従来の諸研究を背景としながら、とくに中国撰述浄土教関係疑経典に資料を限定して考究していくことにし、その他の資料については、紙数の許す限り、関説することにしたい。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

(1) 〈資料篇〉pp. 114—146.

(2) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 287以下、432 以下。

(3) 〈資料篇（pp. 116—117)〉では、

『陀隣尼鉢経』東晋曇無蘭 「阿弥陀」(大正21・865中)

『東方最勝燈王如来経』隋闍那崛多等 「甘露光」(大正21・868中)

『Ḥphags-pa rig-sṅags-kyi rgyal-mo sgron-ma mchog-gi gzuṅs』「ḥod-dpag-med」(The Tibetan Tripiṭaka, Peking Ed. Vol. 7, p. 162—2—5)

を指摘した。

その他の事例として、

Amitāyus (Saddharmapundarīka, ed. H. Kern and B. Nanjio, p.184 ℓ. 13) の訳例『法華経』姚秦鳩摩羅什「阿弥陀」(大正 9・25下) と『仏名経』元魏菩提流支 「甘露丹有機」(大正14・179下)

『称揚諸仏功徳経』元魏吉迦夜(？) 「無量光」(大正14・95下) と『仏名経』「甘露光」(大正14・141中)

などを最近（「菩提流支訳『仏名経』の構成について」『印仏研』第24巻第1号）発表した。

藤田宏達博士は、"阿弥陀仏を「甘露大明王」とか「金剛甘露身」とか名づける例も認められるが、……。後世の陀羅尼経典特有の解釈（藤田博士、前掲書 p. 301)"とされるが、上述の事例はその傾向の年代を6世紀まで遡ることを示している。

(4) しかしながら、これらの難点を有するとしても、こうした疑経典が存在したことは興味ある問題である。中国撰述疑経典とはまた趣を異にしたこれらの資料については別に考察した。「日本撰述浄土教関係疑経典の諸思想」(古田紹欽編『日本仏教の社会的機能に関する基礎的研究』所収)。

(5) 第四章第二節参照。

第三章 成立・写経年代

第一節 疑経典の成立・写経年代概観

前章までにおいて、資料の整理とその性格が明らかにされたと思われるが、それではこうした浄土教関係疑経典は何時頃成立し、信仰の対象となったのであろうか。われわれはこれらの成立・流行の時代を探る前に、まず疑経典全体について概略知っておかねばならない。(1)

そこで第一の資料として挙げられるのは、諸経録の疑経典に関する記載である。従来の経録研究に倣って、まず諸経録における疑経典の部数を調べると以下の通りである。(2)

「新集安公疑経録」(『出三』巻五) 26部30巻

『出三蔵記集』巻五「新集疑経偽撰雑録」20部26巻

『法経録』巻二、四、五「大乗修多羅蔵録：衆経疑惑 21部30巻、衆経偽妄 80部 217巻」「小乗修多羅蔵録：衆経疑惑 29部31巻、衆経偽妄 53部93巻」「大乗毘尼蔵録：衆律疑惑 1部2巻、衆律偽妄 2部11巻」「小乗毘尼蔵録：衆律疑惑 2部3巻、衆律偽妄 3部3巻」「大乗阿毘曇蔵録：衆論疑惑 1部1巻、衆論偽妄 1部1巻」「小乗阿毘曇蔵録：衆論疑惑 1部1巻、衆論偽妄 2部10巻」合計 196部 383巻

『仁寿録』巻四「疑偽」209部 491巻

『静泰録』巻四「衆経疑惑」29部31巻、「衆経疑妄」53部93巻 合計82部 124巻

『内典録』巻一〇「歴代所出疑偽経論録」183部334巻

『武周録』巻一五「偽経目録」228部419巻

『開元録』巻一八「別録中疑惑再詳録」14部19巻、「別録中偽妄乱真録」392部1055巻 合計406部

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

1074巻

『貞元録』巻二八「別録中疑惑再詳録」14部19巻、「別録中偽妄乱真録」393部1491巻　合計 407部1491巻

これによると、最初期の「安公疑経録」から『開元録』『貞元録』までの300有余年の間に400部に近い疑経典が成立したことになる。更に経名の知られない、或いは録に洩れた疑経典を予想すれば膨大な数量であろう。しかし、当然のことながら、われわれは経録に残された部数を鵜呑みにはできない。経録によってはそれ以前の記録をそのまま踏襲した場合があるし、失訳経・抄経・闕本経或いは真経との変更増部を考慮しなければならないのであり、[3]これらはあくまでも一応の目安として考えねばならない。そこでこうした難点を認めつつも更に各経録における初出の疑経典の部数を調べてみよう。それによってわれわれは疑経典が何時頃盛んに創作されたかを或る程度知ることができよう。

「道安録」	26部
『出三蔵記集』	20部
『法経録』	144部
『仁寿録』	27部
『静泰録』	0
『内典録』	46部
『武周録』	107部
『開元録』	91部
『貞元録』	3部

この推移をみると、先の表がほぼ順次に増大している傾向に対して、また異なった傾向に気づく。まず疑経典の部数が最も多く記録された時期としては『法経録』と『武周録』を頂点とする2つの時期、すなわち594年と695年の100年を隔てた2つの時期が判明する。[4] そこには撰集者の査定の精粗、数部の錯誤があったとしても、600年までに成立した疑経典のグループと700年を中心としたグループの二つを考えることができるであろう。

疑経典の成立年代について、諸経録からの傾向を窺ったわれわれは、第二に〈古佚経〉からの成立の上限並びに流布定着の状況を考えておこう。これらの諸経は厳密には疑経典と言えないにしても、現存経典とはいちじるしく異なった異訳経、改変され取意略出の経典、諸経録未載の経典が多いわけであり、更にそうした中に浄土教関係古佚経の何点かが認められる以上、その概要を知っておかねばならないであろう。

〈古佚経〉に関する総合的成果は、昭和十二、十三年とほぼ時期を同じくして望月信亨・常盤大定博士によって発表された。[5] 望月信亨博士は、とくに古佚経の遺文そのものに重点をおかれ、経名・典拠・摘要・『出三蔵記集』・『法経録』・『開元録』の次第で238経を、後に〈異経及疑偽経表〉として、経名・『出三蔵記集』・『法経録』・『開元録』・『奈良録』・所収（現存典拠）・引文（引文の典拠）の次第で敦煌本を含めて385経を表示し総説されている。就中、引証する諸典籍をみると『経律異相』『弘明集』『出三蔵記集』『安楽集』『法苑珠林』『諸経要集』『梵網菩薩戒本疏』(法蔵)などであり、ほぼ初唐までのものが圧倒的に多い。また、大正蔵経第八十五巻所収を主要とする敦煌本については、経録記載34部・未載20部と経録に記載された経典が約7：4の比率で多く、経録別で

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

は『法経録』までのもの13部、『開元録』21部である。これによると古佚経とは逆にむしろ唐中期から以降に創作されていたことが知られる。更に『奈良朝写経』に見出せる経典は119部数えられるが、このことはその当時（奈良朝写経の大半は天平年間729～749年）に如何に日本に豊富な資料がもたらされたかを示すものである[6]。常盤大定博士の研究は、同じ古佚経[7]を扱われても、最もその資料を豊富に提供する『経律異相』『法苑珠林』『諸経要集』そして五代義楚撰『釈氏六帖』に限って、実に多大の労力と時間を費やして調査され[8]、経録（『出三蔵記集』『歴代三宝紀』『開元録』）との査定を試みられた。それを要略すると、

『経律異相』	114経	（経録不載11部[9]）
『法苑珠林』『諸経要集』	52経7集	（　〃　16部）
『釈氏六帖』	32経3集	（　〃　15部）

の古佚経が認められる。そこでこれらの成立の時期を知るために、各典籍の初出の部数を調べると、[10]

『経律異相』	114部
『法苑珠林』『諸経要集』	39部
『釈氏六帖』	22部

となる。ここでも、古佚経の年代に関して、南北朝から隋代に多く、唐代後半から宋代になると少なくなっている傾向を、望月博士の研究と同様に知ることができよう。更に常盤博士は、古佚経における疑経典の役割について、〝猶、是等の中に、明白に疑経又は疑偽とせらるるもの一四経あり。……。猶、経録上にその目を見ざるもの、三九経あり。是等も恐らくは疑偽に属すべきものにして、是等諸経は、一面疑偽経の研究上大に役立つべきなり。〟[11]と古佚経の整理に際して結ばれるが、このことは疑経典研究の分野における古佚経の重要性を示すとともに、経録記載の有無に関して、その多くのものは或る程度査定可能であることを教えている。

以上の望月・常盤両博士の古佚経に関する総合的研究から、われわれが教示される要点としては、まず第1に古佚経に関しては初唐代までに多く、唐中期以降にはそれ程認められないこと、第2に敦煌本に関しては経録による査定可能、不可能を含めて、逆に唐中期以降に盛んに写経されたこと、第3に敦煌本を除いた諸典籍に引用された古佚経については、全体的には経録に記載されたもの、査定されうるものが多いことなどが指摘できよう。更に成立・写経年代とは係わりない点としては、その多くが日本にもたらされていること、疑経研究には古佚経の比重が極めて大きいことなども銘記すべきであろう。

疑経典全体の成立・写経年代の概要を知ることにつとめているわれわれにとって、〈資料篇〉の経過に従えば、次に疑経典に関説する浄土教典籍の成立について考えておかねばならない。しかし、この点に関しては、それがそのまま浄土教関係疑経典の成立・流行の年代に係わるのであり、次節にゆずって良いであろう。そこで、第三に考えねばならないことは、敦煌文献の奥書などに認められる写経年代に関する概要である。この点に関する手がかりとしては、各所蔵毎に諸目録があり、それを参考にしながら一々の敦煌文献に当って確認し整理しなければならないが、ここでも浄土教関係疑経典の写経年代の考察を誤まらしめないために疑経典全体の概要を窺うにとどめておこう。そこで写経年代を一括して取扱った資料として、ここでは芳村修基・土橋秀高・井ノ口泰淳氏「敦煌仏教史年表」（『西域文化研究』第一）により、その傾向を知ることにしよう。跋文、奥書などから

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

知られる写経年代は、早くは三世紀からはじまり、十一世紀前半（1034年？）にまで至っている。これらの年代を記す写経の流れを敦煌仏教史の区分に応じて辿ってみると[12]、まず五世紀までの写経年代には多く疑問を有するので[13]、六世紀以降吐蕃支配期までには『法華経』『華厳経』『涅槃経』〈般若経典〉『大智度論』など中国仏教に大きな影響を与えた代表的大乗経論が多く、これは南北朝～隋～初唐の中国仏教の所謂最盛期の状況とよく相応している。吐蕃支配期には、干支のみのものを含めると『勧善経』『浄名経集解関中疏』[14]の外に経律論疏（釈・鈔・義記）讃文など、帰義軍時代になると『瑜伽師地論』〈仏名経類〉の外には讃文・変文などの多種多様な写経が認められる。疑経典に関してみれば、全体的には比較的早くから写経された『大通方広経』、吐蕃支配期の『勧善経』、帰義軍時代の〈仏名経類[15]〉『闍羅授記経』[16]など、いずれも浄土教に深い係わりを有するものの外は僅かに散見される程度である。

紀年を有する敦煌文献については、以上のように初めは代表的大乗経論疏の写経が目立つが、後になっては大蔵経未収の経論疏から仏教に関する諸文書（変文・讃文・戒牒）など、その時々の社会の様相を示す資料が増大していることが知られよう。敦煌文献の総数は今日目録で知られるだけでも二万余に及ぶが、その中の年代を記すものは極めて少ない。更にその中でも疑経典に至っては微々たるものであるが、そこには実際に心血を注いで仏教に帰依し写経した人々の姿が予想されるのであり、とくに疑経研究にとっては全く新たな資料を提供する極めて重要な分野と言えよう。浄土思想に言及し関係する疑経典については次節で考察することにしよう。

以上、疑経典全体についての諸経録による成立年代、古佚経の状況、敦煌文献の写経年代などについて、その概要を辿ってみた。その結果、次の諸点が知られたであろう。第一に、諸経録については『法経録』までと『武周録』『開元録』を中心とする二つの区別が成り立つこと、第二に古佚経は疑経研究にとって貴重な資料を提供しているが、引証する諸典籍は初唐代までに著わされたものが圧倒的に多く、敦煌出土疑経典については逆に唐中期以降に成立が予想されること、、第三に敦煌文献の写経年代からみた疑経典の成立・流行は、数量からみれば極めて僅かであるけれども、全体に渉って何経かが認められることなどが判明した。

(1) 本節はあくまでも全体的特徴を理解する為の概観であり、その一々の論拠、研究書等についての指摘は原則として省略した。なお（資料篇）pp. 108—113参照。

(2) 諸経録の名称は従来の略称（〈資料篇〉p. 119）に従った。また部巻数は原則として経録に記されたのを挙げたが、実数は必ずしも一致していない（たとえば小野玄妙「録外経典考」『仏書解説大辞典』第12巻、pp. 446-468）。

(3) 経録研究において極めて貴重な資料である『歴代三宝紀』十五巻　隋費長房撰には疑経典に関する項目は無いが、本稿で取上げる数部は「失訳録（巻一三、一四）」に収められている。従来の疑経研究（たとえば望月信亨『仏教経典成立史論』p. 303、牧田諦亮「中国仏教における疑経研究序説」『東方学報』京都　第35冊　p. 355)では「宋世衆経別録」17部20巻、「李廓録」　合計77部、「法上録」51部106巻、「宝唱録」62部67巻などを挙げている。

(4) 先の総疑経典を再構成してまとめた数であるが、ここにも種々の問題がある。従来の経録研究で知られるごとく、真経失訳経などに収録された経典、一経録のみに載った経典、途中に欠けて『開元録』に再録された経典……、厳密に査定すればまた別な考証が必要であろう。ここでは成立に関する全体的傾向を窺うための一助にしたに過ぎない。

諸経録の中でも集大成と目されている『開元録』の前記「偽妄乱真録」392部の内訳をみても『法経録』『武周録』初出の疑経典が最も多いという本稿と同様の傾向は指摘されている（常盤大定『後漢より宋斉に至る訳経総録』pp. 397～399)。

(5) 望月信亨「古佚経の遺文」(『仏教史の諸研究』昭12年、なお『仏教経典成立史論』pp. 314—339参照)。
常盤大定『後漢より宋斉に至る訳経総録』昭13年、pp. 258—355。
その他、林屋友次郎『経録研究』pp. 192—198、同『異訳経類の研究』pp. 233—266などに関説されている。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

(6) 望月信亨「古佚経の遺文」p. 128。
(7) 常盤博士は〈逸存経典〉という名称を用いる（〈資料篇〉p. 100参照）。
(8) 常盤博士、前掲書、pp. 258—259。
(9) ただし、『経律異相』の経録不載部数は別な個所では、13部となっている。これは折伏羅漢経、譬喩経の査定の相違による（pp. 288、353—354）。
(10) 「逸存経典目録」（pp. 325—335）では、これらを175経に整理し表示しているが（実際には174経、『経律異相』(69)諸雑譬喩第六巻脱落？）、それによる再調査である。
(11) pp. 336—337、その外 pp. 354—355、357など。
(12) たとえば、塚本善隆『敦煌仏教史』（『西域文化研究』第一、『塚本善隆著作集』第三巻）。
(13) たとえば、『無量寿経』敦煌本神瑞写経（415年）がよく知られているし、五世紀以前の題跋には信を置きがたいことが指摘されている。藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 77—96。
(14) 矢吹慶輝『鳴沙余韻解説』Ⅰ. pp. 32—37参照。
(15) 〈仏名経類〉については十六巻、十八巻、三十巻の査定が必要である。井ノ口泰淳「敦煌本「仏名経」の諸系統」（『東方学報』京都第35冊）参照。
(16) 塚本善隆「引路菩薩信仰と地蔵十王信仰」（『塚本善隆著作集』第七巻、とくにpp. 360以下参照）。

第二節 浄土教関係疑経典の成立・写経年代

前節において、疑経典全体の成立・写経年代の概要を理解したが、それでは浄土教関係疑経典の成立・写経年代、流行定着の状況はどうであろうか。本節においては、浄土教関係疑経典の成立・写経に関する査定を試み、それらが疑経典全体の成立年代と果して相応しているか、中国浄土教史の流れとどのように係わっているか、浄土教関係疑経典独自の特徴が認められるかなどについて考察しよう。

前節の順序に従って、成立・写経年代を考える場合、まず第一になさねばならないことは、諸経録で査定された浄土教関係疑経典の成立年代を調べることであろう。そこで諸経録に記載された本稿での疑経典を挙げると以下の通りである。

浄土教関係疑経典経録別一覧(1)

	道安録（364年）	出三蔵記集（518年）	法経録（594年）	歴代三宝紀（597年）	仁寿録（602年）	内典録（664年）	武周録（695年）	開元録（730年）	貞元録（800年）	
十往生経							疑	疑	疑	
山海慧菩薩経							疑	疑	疑	
灌頂百結神王護身呪経		失		失、真		失、真	真	真、失	真、失	帛尸梨蜜多羅
随願往生経		失	疑	失、真	疑	失、真	真	真、失、別生	真、失、別生	帛尸梨蜜多羅
灌頂抜除過罪生死得度経		疑	失、疑	失、真		失、疑	真	真、別生	真、別生	帛尸梨蜜多羅
観世音三昧経			疑	失	疑		失	疑	疑	
護身命経		失	疑	失	疑	疑	疑	疑	疑	
救疾経			疑		疑	疑	疑	疑	疑	
普賢菩薩説証明経			疑		疑	疑	疑	疑	疑	
太子讃（経）			疑		疑	疑	疑	疑	疑	
大通方広経			疑	失	疑	疑	疑	疑	疑	
究竟大悲経						疑		疑	疑	
高王観世音経						真	真	疑	疑	
続命経							疑	疑	疑	
無量大慈教経							疑	疑	疑	『慈教経』『続古今訳経図紀』に出、般刺蜜帝、懐迪
大仏頂首楞厳経								真	真	

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

	道安録 (364年)	出三蔵記集 (518年)	法経録 (594年)	歴代三宝紀 (597年)	仁寿録 (602年)	内典録 (664年)	武周録 (695年)	開元録 (730年)	貞元録 (800年)	
三厨経								疑	疑	
仏名経三十巻								疑	真	但し、十六巻とする
善王皇帝尊経	疑		疑	失	疑	疑	疑	疑	疑	
惟務三昧経	疑		疑	失	疑	疑	疑	疑	疑	
目連所問経		失(不見)	失	失	抄	疑	疑、失、	疑、失、欠	疑、失、欠	『目連問経』
善信磨祝経			疑	失	疑		失	疑	疑	『善信神呪経』
須弥四域経			疑		疑	疑	疑	疑	疑	
須弥像図山経							疑	疑	疑	
空行三昧経	疑		疑	失	疑	疑	疑	疑	疑	『定行三昧経』?
優填王作仏形像経		失	失	失	失	失	失	失	失	
舎利弗生西方経		失(不見)					欠	失、欠	失、欠	
生西方斉経		失(不見)					欠	失、欠	失、欠	
浄度三昧経		失、抄	疑	真	疑、欠	真	真	疑、抄、欠	疑、抄、欠	曇曜、智厳、宝雲、求那跋陀羅
占察経			疑	(目録無名)	疑	疑	真	真	真	菩提登

以上の経録別一覧を前にして、それではこの表からわれわれはどのようなことを知ることができるのであろうか。

第一に指摘される点は、浄土教関係疑経典の成立年代に関する傾向である。そこで各疑経典が初めて現われる経録毎の部数をみると、

『出三蔵記集』(含「道安録」) 12部
『法経録』 8部
『内典録』 2部
『武周録』 5部
『開元録』 3部

となる。もとより、疑経典の成立は、その性格上、或る時代を明確に査定できるものではないから、おそらくこれら経録の編纂年代より、真経に比べてもはるかにさかのぼるわけであるが、[2] 一応明記された経録という資料に限ってみれば、『出三蔵記集』『法経録』という六世紀までに最も多く、第二に『武周録』を中心とした700年前後に分けられる。そして、この点に関しては、前に知った経録に認められる疑経典全体の成立年代とよく相応していることになろう。第二に古佚経に関しては、経録に査定されうるものはいずれも『法経録』までに認められるという点である。[3] この点も古佚経全体の傾向と軌を一にしている。第三に敦煌文献に関しては、そのすべてが認められるが、とくに敦煌文献によってのみ今日はじめて知りえた疑経典に関しては『開元録』初出のものまで、後代にまで及んでいることも、敦煌文献全体の傾向と一致している。そしてこれらの特徴は、次の写経年代、引用典籍の考察において、より明らかに納得するであろう。

経録別一覧から知られた浄土教関係疑経典の成立年代については、以上のように疑経典全体の傾向とよく相応しているが、第四に指摘される点としては、これら浄土教関係疑経典を少しく諸経録での査定の分類にまで立入って調べてみると、従来のインド浄土教では考えられない特徴に気づくことである。経録によっては、膨大な諸経律論を査定する際、大乗、小乗に区別して集録している

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

が、本稿で取挙げた疑経典でも主に古佚経の何部かは小乗経典に査定している事例が認められる点である。インド浄土教を考える場合、現存する漢訳経論については、小乗阿含に属するものは認められないことを、われわれはすでに教えられている。[4] ところが『法経録』巻三、四、小乗修多羅蔵録第二、「衆経失訳」には優填王作仏形像経、目連問経、「衆経別生」に十二遊経、「衆経疑惑」に善信神呪経、定行三昧経、救護身命済人病苦厄経、「衆経疑妄」に太子讃経、救疾経、灌頂経が査定され、同時代の『歴代三宝紀』巻十四、小乗修多羅失訳録第二に善信神呪経、優填王作仏形像経、目連問経、救護身命済人病苦厄経が収められている。[5] このような諸経をわれわれはどのように解釈すればよいであろうか。第1に考えられる点は、経録編纂者が前録をそのまま踏襲することによって誤って記録したケースがあろう。その諸例をわれわれは従来の経録研究から教えられているし、[6] また現存する同名の、或いは類似の経典がいずれも〈大正蔵経〉では阿含部に収められていないことからも指摘できよう。第2には、査定は正しくても浄土思想に限っては附加・挿入されたことが考えられる。経録編纂者はその経名、或いは全体の内容から判断したのであり、浄土思想の有無によって査定したことはまずありえないからである。しかしこの場合は疑経典独自の特徴と指摘してよいであろう。第3には、筆者の誤りもあろう。ここでは、従来の諸研究を参考とし、同名の、或いは類似の経名を諸経録の中から取上げたが、経録からは各経典の思想内容を知りえない以上、経録編纂者が指摘した経典とは全く異なった同名経典であることも考えられよう。[7] 小乗経典と査定された中に浄土思想が認められる諸例については、以上のような理由が考えられるが、しかしながら、こうした疑わしい諸経を除外しても、なおかつ小乗経典的内容の中に浄土思想が認められるとしたらどうであろうか。その場合には、われわれはそれを疑経典独自の特徴と指摘してよいであろう。たとえば古佚経としての優填王作仏形像経、十二遊経、太子讃経などは、古佚として内容が分らなければ、われわれでも経題から考えて小乗経典に査定すると思うが、しかも浄土思想が説示されている。おそらく疑経典創作者は大乗・小乗の意識なしに仏教の開祖釈尊を語りながら、また真経の小乗経典ではありえない阿弥陀仏信仰も採用したと考えてよいであろう。ここでは、真経ではありえない一形態として小乗経典での浄土思想を指摘しておこう。なお、同様な事例として釈尊成道に関して浄土思想が説かれる疑経典が認められる。この点については、後の思想形態で考察することにしよう。[8]

以上が諸経録から知られた諸点であるが、第二に古佚経を中心とした引証典籍、並びに敦煌写経年代について考えてみよう。前節においては古佚経の状況と敦煌写経年代の疑経典全体について概観したが、その意図は単に成立年代だけを問題とするのではなく、こうした疑経典が実際に依用された時代、或いはこれらの疑経典が信奉され写経された時代、即ち、中国社会において真実これらの疑経典がその時代の人々に尊い仏の教えとして信仰され、深い影響を与えた流布・定着の様相を知らんがためであった。この意図からすれば、諸典籍に引証された古佚経、実際に心血を注いで写された敦煌文献、そして前節において論及しなかった中国浄土教典籍に認められる疑経典も、同じ立場で取扱ってよいであろう。そしてこの点は浄土教関係疑経典の流布・変遷とも密接に係わった問題でもある。[9]

そこで、古佚経を含めて浄土教関係疑経典を引用する代表的仏教典籍、浄土教典籍、そして紀年を有する敦煌写経を初出の経録を附して挙げると以下の通りである。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

浄土教関係疑経典　流布・写経一覧[10]

		～500	600	700	800	900～
			『観経疏』『往生礼讃』			
			『安楽集』『観念法門』			
			『釈浄土群疑論』			
十往生経				『武周録』(695年)		『楽邦文類』(1200年) } cf.「十往生経の研究」
山海慧菩薩経				〃		
阿弥陀仏説呪				S1910(720年)	『五会念仏観行儀』(P2066)	
念仏超脱輪廻捷径経						『浄土文』
極楽願文						清道光二年(1822年)刊
灌頂百結神王		『出三蔵記集』(518年)				
護身呪経						
随願往生経		〃	『安楽集』『浄土論』『天台十疑』『阿弥陀経疏』(基？)			『楽邦文類』〔奈良朝写経〕
灌頂抜除過罪生死	国立敦煌					
得度経	芸術研(487年)	〃	『法経録』(594年)			
観世音三昧経			『観音玄義』敦煌本(685年？)	守屋本(732年)		cf.牧田論文５Ｃ後半
護身命経		『出三蔵記集』				
救疾経			Ｐ4563(595年)			
			『法経録』(594年)			
普賢菩薩説証明経			〃 陽21(652年)			
太子讃（経）			〃			
大通方広経			〃 中・浜田(673年)			〔奈良朝写経〕
			許谷５(590年)、Ｓ4553(603年)～託生西方無量寿国			cf.牧田論文
究竟大悲経				『内典録』(664年)		Ｓ2499(989年)
高王観世音経		※由来(538年)		〃		cf.牧田論文
続命経				谷37(727年)		Ｓ5531(921年？)
				『武周録』		Ｐ2374(959年)
無量大慈教経				〃		羅(924年)
大仏頂首楞厳経		宝(513年？)		訳出(705年)『続古今訳経図記』		潜100(885年)　〔奈良朝写経〕
三厨経				『開元録』(730年)『集諸経礼懺儀』		Ｓ912、1349、2853、Ｐ3036(938年)
勧善経				Ｓ1185、師20		
新菩薩経				Ｓ622（704年）Ｓ4923、朔22	(793年)Ｓ3792、3871、4739(803年)	Ｓ5113、Ｐ2608
				Ｐ2668(743年)		Ｓ4479(879年)　※干支のもの４部
地蔵菩薩経				谷37(727年)		Ｓ5531(921年？)
仏名経三十巻				『開元録』		※920年写経10余部など
善王皇帝尊経	「道安録」		『安楽集』			
惟務三昧経	〃		〃 『観念法門』			
目連所問経		『出三蔵記集』	〃 『阿弥陀経疏』(基？)			『楽邦文類』
善信磨祝経		『経律異相』『法経録』				〃
須弥四域経			〃 『安楽集』			
須弥像図山経				『武周録』		
			『弁正論』(法淋)			
十二遊経			〃			『釈氏六帖』
空行三昧経	「道安録」？		『法苑珠林』			
優填王作仏形像経			『諸経要集』			
弥勒所問経			『華厳孔目章』			
			『浄土論』『釈浄土群疑論』など			
浄度三昧経		『出三蔵記集』	『法苑珠林』			
		『経律異相』	『安楽集』『観念法門』など			『釈氏六帖』
占察経			『法経録』『浄土論』『釈浄土群疑論』など			
十王生七経						Ｓ5531(921年？)
						Ｓ6230(926年)※干支のもの３部
						許、宝(936年)
						cf. 塚本善隆著作集第７巻pp.360以下

以上の諸典籍、有紀年の敦煌写経をみるとき、われわれは前の経録別一覧から知った特徴をより具体的に明確に認めることができるだけでなく、そこに疑経典を引証する諸典籍を加えることによって、その流行・受容の状況が現実性を帯びて示され、また経録不載の疑経典が登場することによって、庶民仏教としての様相がより鮮明に浮び上ってくることを知るであろう。こうした諸点を先の考察に順じて取上げ、更に新たな特徴を指摘してみよう。

そこで、前の経録から知られた特徴と関係する諸点としては、第一に成立年代がある。経録からみた六世紀の終り『法経録』までに認められた疑経典については、『安楽集』を代表とする仏教典籍、浄土教典籍に引証されていることによって、七世紀に著わされた諸典籍の中で生きていること

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

を知るであろう。また『武周録』『開元録』初出の疑経典も、その一部は同様に七世紀の諸典籍に認められるとともに、写経年代から知られるように十世紀にまで及んでいる。更に、経録未載の疑経典は八世紀から表面に登場し、降っては十世紀に至っても多くの信仰を集めたことを物語っている。このようにみるとき、すでに道安（314—385年）の頃に現われていた疑経典は十・十一世紀に至るまでの数百年の歴史の中でその時々の人々の願いに応じた姿を示しながら、長くそして民衆に密着した形で続々と成立し受容されたことが知られるのである。第二に古佚経に関しては、その成立は六世紀までのものが圧倒的であるが、引文は七世紀に著わされた典籍に多く残されている。それ以降では『釈氏六帖』『楽邦文類』のはるか後に再出されても全く新たな引証というのではない。おそらく中国仏教の最盛期が終り、仏教の定着が続くとともに経典の整備が進んで散佚が少なくなったためであろう。[11] 第三に敦煌文献に関しては、現存する浄土教関係疑経典のことごとくが写経されている。[12] この点では全体に渉っているといえようが、写経年代でみる限り、八世紀以降とくに十世紀に多く、しかも経録未載の何経かが知られたことは、従来の中国仏教文献では全く窺えない貴重な資料であり、本研究では不可欠の価値を有している。これに加えて、次に指摘する査定困難な疑経典がいずれも敦煌文献の中から見出されたことは、その価値を一層雄弁に語っている。そして、この第二、第三の状況を総合すれば、古佚経に関しては七世紀までの諸資料、敦煌写経に関しては八世紀以降の諸資料と対蹠的な年代を提示して歴史を貫ぬいており、浄土教関係疑経典の総合的研究としては両資料を欠いては全く意味をなさないことが改めて知られるであろう。

前の経録別一覧と相応する諸典籍、敦煌写経年代から知られた状況は以上の諸点であるが、更に新たに指摘される点としては第一に浄土教関係疑経典を引証する諸典籍の考察が挙げられる。その第1としては『安楽集』の重要性を銘記すべきであろう。道綽の残した引文は、これなしでは知りえない最初期の善王皇帝尊経、惟務三昧経の内容を伝えるとともに、経録にさかのぼって十往生経の全容を残している。第2には疑経典を引用する典籍は七世紀に著わされたものが多いという点である。とくに浄土教典籍に関しては、まさに道綽—善導と相承した所謂〈善導流〉の最盛期であったが故に、その影響は日本浄土教にも継承され、諸先師の考証は今日でもこの研究に裨益している第3に諸典籍にしばしば引証された疑経典は何かという問題がある。浄土教に関係する疑経典が幾多認められても、そこには重要性の比重が異なるわけで、おそらくそれらは単に浄土思想に言及するにすぎない経典に較べて、その及ぼした教化ははるかに大きいと思われる。[13] それらを挙げると『十往生経』『隋願往生経』『目連所問経』、そして浄土思想に言及していないにもかかわらず、浄土教にしばしば依用された『浄度三昧経』『占察経』などである。われわれは、そこに説かれる思想が何であるかをとくに考慮すべきであろう。

第二に、前に言及した諸典籍に引証された疑経典と敦煌写経から知られた疑経典の、中国社会での受容の態度についても留意しなければならない。一口に中国浄土教といっても、その性格は多種多様な様相を示していた。阿弥陀仏信仰のみを専心した人々から諸行兼修の一つとした人々、浄土教教理に寄与した人々から浄土経典のみを信奉した人々……と中国浄土教の特徴がその多様性にあることは後に論及するとおりである。[14] こうした中国浄土教の特徴を疑経典の受容の態度にあてて考えてみると、そこには年代的に対蹠的であるばかりでなく、その受け取り方にも非常な相違のあることを指摘することができよう。まずこうした疑経典を引証した人々の場合には、いずれも今日にまで名を残した中国仏教の諸高僧、当代一流の知識人であったといえよう。更にこれら諸典籍での

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

疑経典の比重を考えた場合、あくまでも自己の教理を確立するための諸経論の一部であり、疑経典そのものを唯一の正依の経典と考えていたわけではなかった。『十往生経』を深く自己の信仰の依りどころとし、その他多くの疑経典を引証した道綽においてすら、『安楽集』そのものは『観無量寿経』の綱要書であったし、その他の真経の影響をはるかに受けている[15]。それに対して敦煌写経を残した人々の態度はどうであったろうか。写経された疑経典は何もそれを書いた人々の思想を語ってはいないが、こうした無名の人々の態度は経典そのものを対象とした信仰であったに相違ない。敦煌文献から見出された諸資料の中には、すでに散佚した貴重な注釈書（疏・義記・鈔など）が残されている以上に、われわれは紙背文書（Verso）などから庶民仏教の実態を知ることができることを教えられている[16]。諸典籍に引証された疑経典も敦煌写経に残された疑経典も、われわれにとっては等しく貴重な資料であるが、その受容の態度を考えれば、前者は知識人であり、仏教諸経論の一部であり、後者は一般大衆であり、疑経典そのものに依拠していたという点を忘れてはならないであろう。

以上、経録、引証典籍、敦煌写経から知られる成立・写経年代、並びに流布、定着の状況について考えてみた。前節の次第に従えば本節の考察は以上で終ったことになろう。しかしながら、実際にはこれらの諸資料には全く現われない何部かの疑経典が残されている。そこで、第三の問題として、こうした査定の具体的典拠を持たない疑経典について簡単に触れておこう。

まず、これまでに査定できなかった疑経典を挙げると、次の通りである。

無量寿仏説往生浄土呪、念仏超脱輪廻捷径経、

観経、現在十方千五百仏名並雑仏同号、救苦観世音経、大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品、普賢菩薩行願王経、青頸観自在菩薩心陀羅尼経、金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法、大乗瑜伽金剛性海曼殊室利大教王経、観世音不空羂索王心神呪功徳法門名不空成就法、北方大聖毗沙門天王経、大仏頂如来頂髻白蓋陀羅尼経、消灰除横滌頂延命真言経、相好経、

守護国界経、

それでは、これらが全くその成立、或いは流布した年代が査定できないかというと必ずしもそうではない。われわれは、中国仏教史全体の流れから、訳経史の傾向から、思想形態を知ることによる他の漢訳経典・浄土教典籍との類似性から、そして従来の諸研究の考証を参考とすることにより、或る程度査定することができるであろう。その個々の査定については、すでに〈資料篇〉で考証したが[17]、とくに年代に限って取上げると、

無量寿仏説往生浄土呪……阿弥陀仏説呪との関係

念仏超脱輪廻捷径経……竜舒浄土文所収の讃文、発願頌と後書

観経……観仏経典、禅観経典との関係

現在十方千五百仏名並雑仏同号……引用経典との関係[18]

救苦観世音経……唐末期頃[19]

大方広仏華厳経普賢菩薩行願品、普賢菩薩行願王経……普賢菩薩行願讃　不空訳の影響

青頸観自在菩薩心陀羅尼経以下の密教経典……密教経典の訳出状況、類似の思想など、

守護国界経……守護国界主陀羅尼経　般若訳との関係

このようにみるとき、経録等に全く記載されない疑経典についても、その殆んどは年代を推定できるであろう[20]。そして、全体として気づくことはその存在年代がいずれも唐代後半という点である。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

このことは『開元録』によって大蔵経の構成が定められた以降の状況と一致するだけでなく、逆にそれ以前の諸経論の多くは経録に査定されえたという訳経研究の全体的傾向とも相応している。

(1) それぞれの経典を経録編纂者がどのように取扱ったか、各経典が何時頃散逸したり、真経と査定されたかを知るために、疑経・失訳経・欠本経・抄訳経・真経の査定の区別を示した。しかし、経録によってはこれらの諸経典を前録をそのまま承けているのもあり（たとえば『静泰録』、ここでは省いた）注意すべきである。就中、異動のはげしい経典のほとんどはすでに従来の研究で考察されている。出典の巻数、参考論文については〈資料篇〉pp. 119以下（但し、真経と査定した経録について、二・三見落したがここでは補正した）参照。

(2) たとえば、『内典録』初出の『高王観世音経』は元象元年（538年）に由来する（牧田諦亮「中国仏教における疑経研究序説」『東方学報』京都　第35冊 pp. 383—384）。

(3) 『武周録』初出の『須弥像図山経』はその例外であるが、『弁正論』（法琳572—640年）（大正52・521中）に引用されているし、『須弥四域経』（『法経録』初出、『安楽集』所引）と内容が一致しているから、その成立ははるかさかのぼることになろう（牧田博士　前掲論文　p. 374）。

(4) 藤田宏達、『原始浄土思想の研究』、pp. 138—139、231など。

(5) 後の経録では『仁寿録』巻一、小乗経単本に優填王作仏形像経、巻三、小乗別生抄に目連問経、『開元録』巻十五、小乗経単訳欠本として舎利弗生西方経、目連所問経、生西方斎経が認められる。

(6) その典型的な例として、浄土経典に関していえば、〈無量寿経〉五存七欠の問題がある（藤田博士、前掲書、pp. 35以下参照）。

(7) 経録研究の難点の一つであるが、本稿に限ってみても、S.2585『観経』を経題だけみれば『観無量寿経』畺良耶舎訳と誤るであろう。また、目録と内容の違いは敦煌文献に認められた〈浄土三部経〉で知ったであろう。〈資料篇〉p. 123　〈本篇〉第一章第二節p. 83。

(8) 第四章第四節第三項p. 124。

(9) 結論において述べるように（p. 128）本稿では各疑経典の流布・変遷の諸問題については論及できなかった。ここでは、この点に関する諸点も考察することにする。

(10) 本来は成立・写経、流布・定着の状況を知るために、前の経録別一覧と併記する予定であったが、あまりに煩雑になるので別にした。とくに疑経典の成立に論及した論文は参考に挙げた。敦煌文献については、Stein 本と北京本の一部については確認したが、その他は諸目録に従った。なお〈資料篇〉pp. 119以下参照。

(11) これは〈古佚経〉の推移であって疑経典は敦煌文献に認められるとおり十世紀にまで及んでいる。なお疑経典の散佚については牧田博士、前掲論文、pp. 389以下参照。

(12) ただし、『極楽願文』だけは別である。当願文を他の疑経典と同等に扱えないことは前に述べた（〈資料篇〉p. 121）。

(13) 浄土思想に言及する漢訳経論を同等に扱えないことは、とくに本稿で浄土思想と見做された経典を設定したことで納得されるであろう（〈資料篇〉pp. 102—105、114など）。

(14) 第四章第二節参照。

(15) 山本仏骨『道綽教学の研究』pp. 77—83、205—212。

(16) たとえば、金岡照光『敦煌の文学』pp. 66—67。

(17) 〈資料篇〉pp. 119以下。

(18) 拙稿「『阿弥陀経』六方諸仏の異名」（『印仏研』第23巻第2号）

(19) 牧田博士、前掲論文、pp. 382—383。

(20) ただし、相好経については不明である。本経での浄土思想は経典の中に認められるのではなく、本経読誦の際に唱和された形であるから、厳密には浄土思想に言及する疑経典ではない。

要　結

以上、浄土教関係疑経典の成立・写経、そして流布・定着などの年代について考えてみた。

はじめに、こうした年代を誤らしめないために、疑経典全体の成立・写経年代などの概要を諸経

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

録、仏教典籍・敦煌写経の資料から、諸先学の研究を通して窺った。その結果、諸経録から知られた疑経典の成立には六世紀末の『法経録』までのグループと『武周録』『開元録』を中心とする大きく二つの区分が認められること、古佚経を引証する諸典籍からは七世紀までに多く現われること、それに対して敦煌文献から知られる疑経典に関しては、逆に八世紀以降になってその流行が顕著であったことが理解された。

こうした疑経典全体の傾向を背景として浄土教関係疑経典の査定を試み、成立・写経年代、そして流布・定着などの状況を考えてみると、今日〈大正蔵経〉〈続蔵経〉所収の疑経典、諸典籍に認められる古佚経、敦煌文献によってはじめて知りえた疑経典など、その所在の立場を異にしながらも、いずれも疑経典全体の傾向と相応していることが知られたであろう。諸経録に記載の年代としては、六世紀末の『法経録』までに多いが、それだけではなく『武周録』『開元録』などにも初出され、また古佚経を主とした浄土教典籍に引証された年代としては善導流浄土教の最盛期に最も多いことも、すでに見たとうりである。敦煌文献に認められる浄土教関係疑経典についても、諸経録不載の写経年代・査定する典拠のない疑経典が加味されることによって、八世紀から十世紀の流行を知ることができた。このようにみるとき、諸経録、仏教典籍、敦煌文献とその典拠は異なっても、浄土教関係疑経典はその最初期から綿々とその時代その社会の要請のもとで成立し流布したことが、具体的典拠を通して知られた。初めに意図した浄土教関係疑経典が疑経典全体の歴史の流れと相応しているか、更には中国浄土教の流れとどのように係わっているかという課題はこれで理解されたことになろう。

しかしながら、浄土教関係疑経典は、疑経典なるがゆえに、また新たな様相も示唆してくれた。その第一は、小乗経典と考えられた中にも浄土思想が説かれているという点である。小乗経典の中に浄土思想が認められないことはすでにインド浄土教の分野では知られることだが、しかしわれわれは経録で査定された小乗経典の中にその何経かを認めることができた。そして若し、これらの経典が原始仏教的内容を説きながらも、浄土思想に言及していたとするならばどうであろうか。われわれは、真経には認められない特徴として、浄土教関係疑経典独自の形態と指摘してよいであろう。この点に関する思想形態については、次章で再考することにしよう。

第二は、各典拠の違いから知られる浄土教関係疑経典の受容の態度がある。諸経録、諸典籍、敦煌文献という典拠が浄土教関係疑経典研究の貴重な資料としての価値を有することは、それぞれの著述意図とその年代を異にすることにより、一層再認識できたが、その中でも年代を対蹠的に隔てた浄土教典籍と敦煌文献に認められた疑経典は、またそれを信奉した人々についても対蹠的な異なりを示してくれた。今日のわれわれには同じ浄土教関係疑経典として読むことができても、前者は社会の知識人によってあくまでも自己の思想形成の依りどころとしての諸経論の一経であり、後者は社会の底辺の庶民によって唯一の経典として写経されたことは先に論及したとおりである。

その他、二、三の細かな点を挙げれば、それぞれの疑経典はいずれも浄土教に関係するといっても、長い歴史の中での影響力、説得力を考えれば各自異なるわけで、思想形態を考察する場合に留意しなければならない点、比較的前半に成立した疑経典は殆んどが諸経録で査定しうること、しかもその多くは日本の古写経に認められる点、また、典拠を有しない疑経典については総合的分析によって査定可能であり、唐代後半に査定しうる点などが知られたであろう。

現在のわれわれに対して、浄土教関係疑経典そのものは自己の歴史を何も語ってはくれない。し

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

かしながら、諸資料・諸研究を通して、中国仏教史の流れの中で辿っていくと、疑経典そのものが長い歴史の上で或る時代に生れ、そして活躍し信奉され、また眠りについて、今日に至った様相を生き生きと語っていることが感じられるであろう。

第四章 思想形態

第一節 浄土教関係経論の思想形態概観

中国撰述浄土教関係疑経典についての諸問題を解明しているわれわれにとって、本章ではいよいよ本研究における最大の課題であるそれらの思想形態について立入ることにしよう。

そこで、そうした浄土教関係疑経典の諸思想を考究する前段階として、従来の各章と同じく、それを誤まらしめないために、常識的理解として二、三の問題について学んでおく必要があるであろう。本節では、そうした分野の中から、浄土教関係漢訳経論の主要な思想形態について概観しようと思う。

浄土教関係漢訳経論の諸思想について考察する場合、その資料としてはすでに指摘されている藤田宏達博士〈一覧表〉[1]並びに本稿で指摘した〈浄土思想と見做された真経〉を含めて300部を超える漢訳経論が考えられる。しかしながら、その一々を列挙することは容易ではないし、その必要もないであろう。ここでは便宜的方法として、中国仏教に大きな影響を与えた大乗経典の中でもとくに代表的経論に認められる浄土思想、更には一つの経典の中に多種多様な浄土思想が認められる経典などを取上げることにしよう。それらの諸思想を窺うことによって、浄土教関係経論の全体をほぼ理解したことになるであろう。[2]

そこで初めに中国仏教史の上でも非常に大きな影響を与えたと思われる代表的大乗経論[3]の中の浄土思想について列挙してみよう。[4]

『般舟三昧経』支婁迦讖

念阿弥陀仏、……。見阿弥陀仏。……。聞阿弥陀仏、……。生阿弥陀仏国。

用是念仏故、当得生阿弥陀仏国。

『法華経』鳩摩羅什

西方二仏、一名阿弥陀仏、

若有女人、聞是経典、……、即往安楽世界。

阿弥陀仏大菩薩衆囲繞住処。

『維摩経』鳩摩羅什

釈迦牟尼仏、阿弥陀仏、阿閦仏、……

『大智度論』鳩摩羅什

阿弥陀仏時、人寿無量阿僧祇劫。

阿弥陀仏世界種々厳浄、……、皆見無量寿仏世界厳浄。

誦阿弥陀経及摩河般若波羅蜜、……、阿弥陀仏与彼大衆俱来。

如阿弥陀仏安楽世界等。

如無量寿仏国人、生便自然能念仏。

菩薩入是三昧、即見阿弥陀仏。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

阿弥陀仏、寿命無量、光明千方億由旬。

阿弥陀仏、先世時、作法蔵比丘、仏将導遍至十方示清浄国、令選択浄妙之国、以自荘厳其国。

如世自在王仏、将法積比丘、至十方、示清浄世界。

餘仏阿閦阿弥陀等。

如阿弥陀等諸経中説。

『十住毘婆沙論』鳩摩羅什

念…阿弥陀仏、

阿弥陀等仏及諸大菩薩、称名一心念亦得不退転。更有、阿弥陀等諸仏、亦応恭敬礼拝、称其名号。

……皆称名憶念、阿弥陀仏本願如是。

『涅槃経』曇無讖

猶如西方無量寿仏極楽世界。

『金光明経』曇無讖

亦応敬礼……西方無量寿仏…。

(cf.『**金光明最勝王経』義浄** 南謨阿弥陀仏。)

『華厳経』仏馱跋陀羅

如此娑婆世界釈迦牟尼仏刹一劫、於安楽世界阿弥陀仏刹為一日一夜。

我若欲見安楽世界無量寿仏随意即見。

……無量光仏……。

或見阿弥陀観世音菩薩。

(『**普賢行願讃』不空** 汝等聞此願王、……応当諦受、受己能読、読己能誦、誦己能持、乃至書写

……皆涅往生阿弥陀仏極楽世界。)

『楞伽経』菩提流支

是皆一切従阿弥陀国出。

名竜樹菩薩……証得歓喜地、往生安楽国。

『大乗起信論』真諦

若人専念西方極楽世界阿弥陀仏、所修善根廻向、願求生彼世界、即得往生。

『大般若経』玄奘

猶如西方極楽世界。

『大日経』善無畏 一行

西方無量寿如来 (四方仏)。

『金剛頂経』不空

次結四如来三昧耶印契、……無量寿於喉…。

五如来印契、……無量寿頂後……。

などの浄土思想が説かれている。これら大乗仏教の代表的経論の諸思想をまとめると、

念仏、見仏、十方・四方・諸仏中の阿弥陀仏、聞経往生、浄土荘厳、譬喩としての阿弥陀仏・極楽、

称名恭敬礼拝、憶念、南謨、書写往生、密教五仏中の一仏

ということになる。ところでわれわれが、今日〈浄土三部経〉を中心として理解している浄土教、

或いは漠然と考えている浄土思想の中心的概念は〝阿弥陀仏に対する念仏などの行業による極楽往

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

生〻ということになろうが、ここに列挙した大乗経論の中で論書を除いた他の代表的経典では、こうした思想に類する内容は『般舟三昧経』を除いて極めて少ないという点が注意せられる。即ち、中国仏教に入って初めて発生し成立した各宗の所依とされた代表的経典の中では、浄土思想の記述に限っては必ずしも浄土教の中心概念を主張したものではないということである。次に指摘するように、中国浄土教の特徴は日本浄土教における明確な〈浄土三部経〉中心の歴史とは異なり、様々な行業と種々な性格を有した浄土教が存在した、即ちその多様性が知られているが、少なくとも各宗派の所依とした経典の浄土思想の記述からは直接の影響を受けていなかったと言えるであろう。これをまた逆に解せば、中国浄土教においてもやはり〈浄土三部経〉がそうした規定は無かったにしても、中心的経典として考えねばならないことを意味している。

次に、一つの経典の中で特異な、或いは多種な浄土思想の形態を示す経典の何点かを列挙しよう。

『月燈三昧経』那連提耶舎

若欲得見弥陀仏及彼安楽世界等……応当聞持是三昧。

弥陀仏為説無量勝利益、或復往詣安楽国。

善持彼仏真妙法、悉得往生安養国、…其仏号曰阿弥陀。

護持諸仏法、……往生安楽国、弥陀為説法。

斯由得是三昧故。……弥陀仏……為現住其前……決定生彼安楽国。

常行寂滅定、……能往諸仏国、所謂安楽土、得見弥陀仏。

『陀羅尼集経』阿地瞿多

准阿弥陀仏転法輪印。

若有人、能日日供養、作印誦呪、……如阿弥陀仏毫光相似。

「阿弥陀仏大思惟経説序分第一（阿弥陀仏の諸印）」

一切衆生、修行善法、得生阿弥陀仏国並見彼仏。

欲生彼国者、応当受持阿弥陀仏印並陀羅尼及作檀法供養礼拝。

以衆華散阿弥陀仏、発願誦呪者、得十種功徳……

布施阿弥陀仏者、……死生阿弥陀仏国。

若人五體投地、恭敬礼拝阿弥陀仏者、往生彼国。

誦持阿弥陀仏陀羅尼。

当作阿弥陀仏像。

四方著飲食菓子、種種音楽、供養阿弥陀仏。

呪師作阿弥陀仏身印、誦陀羅尼、……。次画師画仏像、法用中央著阿弥陀仏、結跏趺坐。手作阿弥陀仏説法印。

其阿弥陀仏坐七宝高座。

安置阿弥陀仏像。

請喚阿弥陀仏及観世音大勢至像。

当発心誦阿弥陀経念阿弥陀仏……

……以上阿弥陀仏法竟。

誦阿弥陀経、一切処用皆悉得験。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

『大宝積経』菩提流志など[5]

無量寿威光、阿閦大名称、若欲見彼者、当学此法門。

其土清浄、如無量寿国。

文殊師利所得仏刹功徳荘厳、与阿弥陀仏刹、為等不耶。……此一滴水喩阿弥陀仏刹荘厳。

見聞阿弥陀如来。

決定得生安楽国、面奉無量寿、往安楽国巳、無畏成菩提。

……、則今無量寿如来是也。

汝等……於後得生阿弥陀仏極楽世界。

阿弥陀仏極楽世界功徳利益、若有楽生発十種心……。

所得国土功徳荘厳、亦如西方極楽世界、無有異也。

『不空羂索神変真言経』菩提流志

敬礼無量光如来。

冠有化阿弥陀仏。

静心端坐、観置西方極楽世界。

若欲常見阿弥陀仏……者、毎日当誦請召真言加持…。

阿弥陀仏夢為現前、若命終巳、直生西方極楽刹土。

受持読誦者、……為阿弥陀仏之真子。

東面置釈迦牟尼仏像阿弥陀仏像、……、釈迦牟尼仏阿弥陀仏……一時現身。

時真言者、……、見釈迦牟尼仏阿弥陀仏……。

誦持母陀羅尼真言秘密心真言者……。若命終後当得往生安楽国土。

西面阿弥陀仏。

恭敬供養阿弥陀仏一切菩薩。

毗盧遮那如来、……。左阿弥陀仏。

大悲心観阿弥陀仏観観世音菩薩、誦持之者、……亦等阿弥陀仏。

先受菩薩戒……者、当捨身巳、直往西方極楽国土、蓮華化生、住不退地。

以上の思想形態を整理すると、

三昧見仏、持法往生、供養・作印・散華・布施・恭敬礼拝・誦陀羅尼・作像・画像・誦経などによる見仏・往生・得益、譬えとしての阿弥陀仏国、本生説話の阿弥陀仏、阿弥陀仏極楽世界の十種功徳、化仏としての阿弥陀仏、諦観極楽、呪真言往生、受戒往生

などになる。これらの思想形態をみるとき、われわれは漢訳経論における阿弥陀仏に関するすべての表現形式と極楽往生などに関する多様な行業を或る程度知ることができるであろう。[6] そしてこの場合の特徴としては、多様な浄土思想を記述する経典は訳経史的にはほぼ唐代以降という比較的遅い年代という点であり、その中でもとくに注目されることは密教経典の中に浄土思想に関する多種多様な思想形態が網羅されているという点である。成立史的には最も後期に現われる密教経典にはそれまでの浄土思想に関するすべての表現形態が認められるが、逆に密教特有の作印・誦持陀羅尼による往生などの思想は他の経典には殆んど説かれていない。このことは浄土思想に言及する漢訳経論の全体的特徴を考える場合にも留意すべき点であり、また漢訳経論を依りどころとして形成された中国浄土教を考える場合にも考慮すべき特徴と言えるであろう。より具体的に言えば、浄

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

土思想に言及する漢訳経論を考える場合、その過半数を占める密教経典の比重は、数量的にはもとより、様々な思想形態を網羅した点では質的にも極めて重要であるが、しかしそれらが中国浄土教に与えた影響となると訳出の年代も後期であり、それ程の比重を占めてはいなかったということである。[7]更に第一の代表的大乗経典に説かれた浄土思想の特徴を加味して言えば、中国浄土教に関してはやはり経典としては〈浄土三部経〉の影響が大きかったと言えるであろう。[8]

(1) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 136—164。

(2) このことは、その他の典拠を無視したわけではない。なお浄土教関係経論の諸思想を知るには、藤田宏達博士〈一覧表〉によって一々を大正蔵経に当るしかないが、それを一瞥するには今日でもなお『阿弥陀仏説林』(『真宗全書』7)が好便である。

(3) 代表的大乗経論として、何が考えられるかは諸説があろう。ここでは今日の一般的通例に従った。中村元『インド思想史』pp. 116以下、渡辺照宏『お経の話』、金岡秀友『仏典の読み方』など参照。

(4) ここでは、主たる浄土思想を挙げ、類似の思想、一々の巻数、典拠、また異本との相違などについては煩を避けて記さない。但し、全く異った記述をする関係経論については取上げる。

(5) 本経は49種の経典を合糅したものであり、藤田博士〈一覧表〉では訳者順(那連提耶舎・闍那崛多・実叉難陀・菩提流志)に指摘しているが、ここでは『大宝積経』の配列で挙げた。

(6) その他の記述としては、『無垢浄光大陀羅尼経』弥陀山の〈造塔往生〉がある。

(7) 拙稿「中国における密教系浄土思想」(『印仏研』第19巻第2号)

(8) 浄土教関係経論の整理・検討は、単に本研究に関与するだけにとどまらず、広く中国浄土教の基礎的資料として極めて重要である。また梵蔵諸本を中心とすることにより、インド浄土教の解明にも必要なことと思われる。ところがそうした研究となると矢吹慶輝、藤田宏達博士の成果を除いて総合的に取扱ったものは多くはない。具体的に内容を列挙したものとしては未だ『阿弥陀仏説林』(継成)に依っている。ここで比較的紙数を割いて要出したのも、後の課題として研究することを意図したためである。

また、浄土教関係漢訳経論の思想形態を考えたわれわれは、次の課題として経論そのものの思想から、それを取扱った矢吹慶輝、藤田宏達博士の業績に示された思想内容にも立入らなければならないであろうが、ここでは煩を嫌って省略する。その理由としては、第一に両博士の研究はあくまでもインド浄土教の解明を意図したものであり、漢訳資料そのものでは無いという点、第二には疑経典の浄土思想を主題とする本稿では、漢訳経論の浄土思想の考察のみでその意図は達せられると思うからである。

第二節 中国浄土教の思想形態概観

浄土教関係経論の思想形態を概観したわれわれが第二になさねばならないことは、それらを基礎資料として成立し発展した中国浄土教の主要な思想形態について概要を辿らねばならないであろう。ところがこの点についてもその一々を列挙することは容易でない。ここでもやはり便宜的方法として、今日〈浄土三流〉として知られる諸思想並びにその他注意すべき何点かを記憶するにとどめよう。[1]

法然によって〈浄土三流〉と理解された中国浄土教の分類は、当面の中国人にはそのように解されなかったにせよ、われわれが中国浄土教の地理的思想的大要を把握する場合、極めて好便な視点としてしばしば用いられている。[2]

その筆頭に挙げられる第一の流れとしての盧山慧遠(334—416年)は、単に一浄土教家の枠に収まらない初期中国仏教の代表的高僧であるが、浄土思想に関して言えば『般舟三昧経』による定中見仏であったことはすでに触れた。[3]

次に、今日〈善導流〉の歴史として日本浄土教がそのすべてを負うている第二の流れ、所謂〈中

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

国浄土三祖〉について探ってみよう。[4]まずその鼻祖、曇鸞(476—542年)については、主著『浄土論註』に説かれた〈五念門〉の解釈が挙げられよう。もとよりその素材が『浄土論』である点では曇鸞自身の思想ではないにしても、彼によって解釈され弘められた思想形態として五念の行(礼拝・讃歎・作願・観察・廻向)が挙げられることに異論はないであろう。第二祖、道綽(562—645年)は、通常その弟子善導によって大成された〈称名念仏〉の前段階として、諸行往生から観念・称名思想が未分の形で説いたと指摘されている。[5]その中でも諸行に関する思想を前の論究[6]から並列的に摘出すると、「修諸行業」「念仏」「供養」「咨嗟」「作仏」「回願」「精進」「十行」「聞法」「発心」、そして最後に『十往生経』の引文からの「十往生法」が認められる。このことは道綽の中心思想が念仏にあったにせよ、彼にとってその当時経典を通して知られたすべての諸行であったことになろう。更に、留意しなければならないことは、すでにしばしば言及した如く[7]、中国浄土教家の中でも最も多く疑経典の引文が多いという点である。道綽の疑経観については既に考察もあるが、[8]その基本的態度には世俗社会の教化、在俗者の諸行を説示した点が[9]深く係わっていることを銘記すべきであろう。第三の、そして今日〈善導流〉の念仏として日本浄土教に最大の影響を与え、「偏依善導」(法然)「独明仏正意」(親鸞)と敬慕された善導(613—681年)については、それゆえに何を中心思想として取上げるかは苦慮するところである。古来〈五部九巻〉の著述から、〈凡入報土論〉〈正雑二行・正助二業の判釈〉〈称名念仏〉などについて、幾多の研究がなされているが、浄土教関係疑経典の思想形態を探る上での諸思想として、強いて挙げるとすれば、〈五正行(読誦・観察・礼拝・称名・讃歎供養)〉[10]であろう。就中、「正業」として〈称名念仏〉が中心思想であったことは彼自らが指摘しているが、往生の行業として〈五正行〉が重視されたことも銘記すべきである。[11]善導について、更に本稿と関係して挙げるべき業績としては、浄土変相並びに諸讃文の著述がある。中国仏教における大きな研究分野、それも或る時代の社会に根ざした資料としての諸変相、諸讃文の研究はまさしく中国人の信仰の発露として描かれ、作られたという点では疑経典と共通の地盤で問われる重要な課題であり、その解明は疑経典以上に中国仏教の実態を示す資料である。しかも敦煌文献の中にはこうした資料が新たに豊富に見出され、かつその中には浄土思想に言及するものも極めて多い。中国仏教における変相、讃文研究の重要性を考えるならば、善導の業績は、こうした分野から改めて評価されるであろう。[12]以上の〈中国浄土三祖〉の諸思想は、その後の宗学において念仏思想を中心として精緻に会通されていったが、念仏以外の行業の何点かも認められたわけである。

最後に残された浄土第三流、慈愍三蔵慧日(680—748年)について言えば、今日残された資料『往生浄土集』巻上(残存)からみると、持戒・念仏・誦経・諸行・造像・写経などを勧めており、[13]それ故、諸行兼修、融合的浄土教の祖とされている。中国浄土教の歴史は唐中期以降、所謂天台系・律系・禅浄融合の浄土教として続いていく。そうした中でも数多くの浄土教徒が知られているが、とくに本稿と関係する二・三の思想を挙げれば、法照による五会念仏と諸讃文、[14]永明延寿によって代表された諸行兼修(とくにそれまでにはあまり認められない誦陀羅尼の浄土思想)、[15]更には宗暁の依用した疑経典などが留意されよう。

以上、中国における最も代表的な浄土教家の思想形態をとくに行業論を主として概観した。最後になお補足し窺うべき一、二について附言しておこう。

その第一は、これらの代表的浄土教家が、中国浄土教という大きな分野において、如何なる位置

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

を占めるかという点である。中国浄土教そのものを荷なった最高位の人々であったという点では第一位に値することには異論はないにしても、こと庶民仏教、大衆の願いによって現われた浄土教関係疑経典の分野から評価した場合には、またその立場も自ずから異なることを知らねばならない。疑経典を引証した思想家たちでも述べたように、これらの人々もまたその時代を代表する諸高僧、知識人であった。誰れでもできる小豆念仏を説き、七才の童にまで慕われた道綽ですら、自己の修道生活は厳しかったと伝えられている。[16]それでは、こうした諸高僧とは異なり、一般の世俗社会で行われていた浄土教は何であったろうか。この場合、われわれが知ることのできる資料として諸往生伝の、とりわけ在俗信者の行状が挙げられるであろう。しかしながら、こうした庶民・大衆の浄土教をここで取上げるゆとりはない。先学の研究に従うと、[17]やはり念仏思想（称名・観念）が中心でありながら善導の〈五正行〉に相応する読誦、観察(観法)、礼拝、讃歎供養、更には懺悔、講経、写経、造像、画像などが指摘されている。その行業はいずれも代表的浄土教家の説かれた諸思想に認められることでは同じであっても、文盲の老女、殺猟者など庶民によって信仰された浄土教であったという点では、疑経典信仰と共通の地盤であることに留意すべきである。第二は、敦煌浄土教の歴史を知ることも重要な分野である。浄土教関係疑経典資料として、敦煌文献はすべての点で不可欠の条件であることを再説したが、この場合、或る程度敦煌浄土教の大要を知っておかねばならないであろう。しかしながら、本稿の疑経典においてもそうであるように膨大な敦煌資料はなお調査、整理の段階であり、そのすべてがなし終えなければ納得する理解はできないであろう。敦煌浄土教を総合的に取扱った研究は未だ認められないようである。ここでは、敦煌浄土教研究を意図する場合の諸資料並びに浄土思想に関説した従来の研究から[18]数例を挙げるにとどめて他日に期したい。そこで考えられる諸資料であるが、第1には中国浄土教がそうであるように、浄土教関係経論とりわけ〈浄土三部経〉の写経状況を調べねばならない。この中、『無量寿経』『阿弥陀経』についてはすでに研究が認められるし、本稿でも目録から知られた〈浄土三部経〉の補正は指摘した。[19]第2には浄土教典籍の研究がある。この点については、法照の研究をはじめその多くは考察されている。[20]第3には敦煌写経の跋文・奥書に認められる浄土思想がある。たとえば、S 4553『大通方広経』(603年)、S 2863『観音経』(684年）の跋文には託生西方無量寿国（阿弥陀仏国）が願われている。[21]このことより、浄土思想の説かれない経典の写経を通した願生思想を知ることができる。[22]第4には前にも述べた願文・讃文に認められる浄土思想がある。その数例は後に論及しよう。[23]そして第5に浄土教関係疑経典の解明も含まれよう（本稿はこの点では中国浄土教研究の極めて狭い一分野にすぎない)。こうした諸資料の検索、考証を終えてのちに、中国仏教における敦煌関係の諸事項（たとえば訳経僧、社会事情）を勘案して、はじめて敦煌浄土教の全貌が知られることになろう。そしてそのすべてが中国に由来するという点では、新たな中国浄土教、庶民仏教としての浄土教を示すことになる。その数例を知っただけでも、532年『無量寿経』一百部の写経から、七世紀の往生願文、八世紀の曇鸞『讃阿弥陀仏偈』の写本、善導の写経、讃文、西方浄土変、唐中期の法照の活躍、十世紀の浄土思想など長くに渉って浄土教が信奉された歴史を認めることができる。

以上、中国浄土教の思想形態を概観し、併せて一、二の点について注意した。

浄土思想に言及する極めて多数の漢訳経論においては多種多様な思想形想を認めることができたが、中国浄土教に及ぼした影響となるとやはり〈浄土三部経〉の教説であり、とりわけ善導に代表される『観無量寿経』の影響が知られたであろう。また中国浄土教の諸思想を通して、われわれは

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

〝阿弥陀仏への念仏による往生〟の教えを中心概念として認めえたが、そればかりでなく、様々な行業によって浄土信仰がなされたことも知った。総じて言えることは、日本浄土教と異なり、専修に浄土教に帰依をした人々から諸行兼修の一つとして実践した人々、ただ単に教理に寄与した高僧[24]から在俗無名の往生人まで、実に多種多様な浄土教徒が知られるのである。即ち、中国浄土教の特徴は思想的にも実践的にもその多様性にあったと言えるであろう。それでは、中国撰述浄土教関係疑経典の思想形態は、以上の浄土教関係経論並びに中国浄土教の諸思想と対比して、如何なる形態を有し、何が強調されていたであろうか。かつ疑経典独自の浄土思想は何であったろうか。

(1) あくまでも中国浄土教の思想形態概観であるから、各浄土教家の中心思想が何であり、それが他の思想とどう係わっているかなどということまでは配慮しない。一般的には、教判論、仏身論、浄土論、衆生論、往生論、信心論、念仏論などが予想されるが、後に具体的に指摘するように(pp. 119、124)、疑経典の浄土思想には高邁な教説が説かれているわけではないし、精緻な教理を背景として創作されたものは少ない。この点でも極く表面的に思想形態を窺えば足りるであろう。疑経典創作の背景には、素朴な阿弥陀仏信仰と願生思想があったという前提で、ここではとくにそのための行業を中心にみていこう。

(2) 道端良秀「支那浄土教の時代区分とその地理的考察」(『大谷学報』第16巻第2号)、同『中国の浄土教と玄中寺』pp. 7—14、前号「問題の所在」(pp. 97—98) 参照。

(3) 〈資料篇〉pp. 102、104。むしろ、廬山流の浄土教については、その遺風を継いで唐代末期より明確な形をとり、宋代以降に発展した蓮宗の人々が重要である。そこでの諸思想について、一々取上げるゆとりはない。小笠原宣秀『中国近世浄土教史の研究』参照。

(4) 三祖の伝記については、野上俊静『中国浄土三祖伝』参照。

(5) たとえば、藤原凌雪『念仏思想の研究』pp. 170—184、山本仏骨『道綽教学の研究』pp. 376—409。

(6) 山本教授、前掲書、pp. 376—380。

(7) 〈資料篇〉pp. 102、105、本号第三章第二節pp.93—95。

(8) 大内文雄「安楽集に引用された所謂疑偽経典——特に惟無三昧経・浄度菩薩経について—」(『大谷学報』第53巻第2号)、同「安楽集所引疑偽経典の研究」(『印仏研』第23巻第2号) など。

(9) その顕著な例として『十往生経』の布施・孝順敬長・往詣などが挙げられる。また、道綽の世俗社会への教化はすでに迦才 (『浄土論』大正47・83中、98中) によって高く評価されている。拙稿「中国浄土教における社会意識」(『日本仏教学会年報』第35号) 参照。

(10) 『観無量寿仏経疏』巻四 (大正37・272上中)

行有二種、一者正行、二者雑行。言正行者、専依往生経行行者是名正行。何者是也。一心専読誦此観経弥陀経無量寿経等、一心専注思想観察憶念彼国二報荘厳、若礼即一心専礼彼仏、若口称即一心専称彼仏、若讃歎供養即一心専讃歎供養、是名為正。又就此正中、復有二種、一者一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業、順彼仏願故。若依礼誦等、即名為助業。

なお、大原性実『善導教学の研究』(昭49年版)pp. 179—208 参照。

(11) 善導教学において、浄土教関係疑経典と思想形態の点でよく相応する教理としては、むしろ〈行儀分〉に説かれる思想がある。たとえば『観念法門』「観仏三昧法」での持戒念仏誦経、「五種増上縁義一巻」(この部分には異論がある。望月信亨『中国浄土教理史』p. 184) での十往生経、浄度三昧経、惟務三昧経の疑経典をも引証しながら示す造像、称揚礼拝香華供養、画像などの行業とその利益としての延年、滅罪、護念の思想 (大正47・23中、24下—25下、28中など)。

(12) 善導のこうした評価については、浄土教に関係する諸変相、諸讃文の総合的研究の後に、はじめて位置づけられるものであろう。前註での問題を含めて他日に期したい。

なお、浄土思想に言及する敦煌文書 (講経文、願文、讃文など) については〈資料篇〉p. 101—102、本号第四章第四節第三項p. 126参照。

(13) 大正85・1237下—1240中、1242上中、なお、拙稿「慈愍三蔵慧日に関する二、三の問題」(『印仏研』第17巻第2号) 参照。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

(14) 塚本善隆『唐中期の浄土教』
(15) 『智覚禅師自行録』(卍続2・16・1)
(16) 『続高僧伝』巻二〇(大正50・593下—594上)
(17) 小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』pp. 99以下、とくにpp. 142—153。
(18) たとえば、塚本善隆「敦煌仏教史概説」(『西域文化研究』第一、『塚本善隆著作集』第三巻)、牧田諦亮「中国仏教における疑経研究序説」(『東方学報』京都第35冊)、小笠原宣秀「中世吐魯番浄土教の信仰形態」(『福井博士頌寿記念 東洋文化論集』)その他『西域文化研究』所収の関係論文など。
(19) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 85—96、井ノ口泰淳「敦煌本『阿弥陀経』について」(『宗教研究』第177号)、小笠原宣秀「仏説阿弥陀経解説」(『西域文化研究』第一)など。

第一章第二節p. 83参照。
(20) 塚本善隆『唐中期の浄土教』、佐藤哲英「法照和尚念仏讃」(『西域文化研究』第一、六)、その他『西域文化研究』第一所収の諸論考(pp. 89—107、204—207)など。
(21) L. Giles : Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum, No. 3151, 5417A (pp. 85, 161), 『敦煌遺書総目索引』pp. 168, 204, 牧田博士、前掲論文、pp. 373—374。
(22) 〈浄土経典〉以外の経典(『法華経』『金剛般若経』『涅槃経』など)の読誦、写経による往生人はよくみられる現象である。小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』pp. 145—146参照。
(23) 第四節第三項参照。
(24) ここでは論及できなかったが、『観無量寿経』の註釈で知られる浄影寺慧遠、天台大師智顗、嘉祥大師吉蔵など各宗の大成者が浄土教の熱心な実践家であったかというと異論があろう。『続高僧伝』巻八、十一、十七(大正50・489下—492中、513下—514下、564上—568上)、鎌田茂雄「浄影寺慧遠の思想」(『中国仏教思想史』)、佐藤哲英『天台大師の研究』pp. 64—66、555以下、望月信亨『中国浄土教理史』pp. 89—126など参照。

第三節 疑経典の思想形態概観

前節までにおいて、浄土教の分野で問題にすべき浄土教関係経論並びに中国浄土教における思想形態について概略理解したが、本節では疑経研究の分野における思想形態について大略知っておこう。

ところが、この問題に関しては必ずしも長い歴史の中で研究されていたわけではない。疑経典を取扱った記録としては、古く「道安録」から日本浄土教の経典疏鈔目録に至るまで、その時々の撰述意図を異にしながらも続いているが、これらはあくまでも目録としての評価であり、疑経典そのものの思想について考究した研究となると望月信亨博士などの近代以降になる。ここでは、先に倣つてすでに指摘した疑経研究の中から、[1]とくに思想形態を論及した一、二を紹介し、併せて浄土思想の認められる疑経典を添記することにより、疑経典の思想形態概観としよう。

そこで、まず望月信亨博士による一連の疑経典に関する研究論文から思想に関する論考を本稿で取扱う諸資料を添記して取上げると、[2]

道儒二教との調和……須弥四域経、須弥像図山経、浄度三昧経、薬師瑠璃経、続命経。
時の王者等の批判
僧俗の戒儀……善信摩祝経
新奇の説を仏説に借り、自己の所信を鼓吹
如来蔵の教義……占察経、大仏頂首楞厳経
弥陀関係疑偽経……善王皇帝功徳尊経、薬師瑠璃光経、随願十方浄土往生経、須弥四域経、十往

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

生阿弥陀仏国経、阿弥陀仏覚諸大衆観身経

観音関係の経……観世音三昧経、高王観世音経

弥勒関係の経

地蔵関係の経……地蔵菩薩経

閻羅王関係の偽経……浄度三昧経

閻羅王思想と地蔵信仰の結合……預修十王生七経

仏名経……仏名経三十巻、大通方広経

善悪因果関係の経

世界成立関係……須弥四域経、須弥像図山経

未来記関係

卜占関係……占察経

呪術関係

など[3]が指摘されている。こうした内容並びに創作意図を知ると、われわれは、一方では高度な仏教教理を主としたものから、俗信・迷信に由来した様々な思想形態を認めることができ、疑経典を通して、仏教教理の影響だけでなく、従来の漢訳真経には認められない思想、或いはそれを要請した社会背景に気づくであろう。

こうした従来の疑経研究をふまえながら、敦煌文献の発見によって新たに知られた（常に仏教の主流からは排斥されていた）疑経典を総合的に取扱い、民衆仏教の本質、社会の実態の解明を意図された牧田諦亮博士の研究では、とくに「疑経撰述の意義」[4]について何点か論及されている。

(1) 主権者の意に副わんとしたもの

(2) 主権者の施政を批判したもの

(3) 中国の伝統思想との調和や優劣を考慮したもの……須弥四域経、須弥像図山経

(4) 特定の教義、信仰を鼓吹したもの……仏名経、大通方広経、地蔵菩薩経、閻羅王経、観世音三昧経、救苦観世音経

(5) 現存した特定の個人の名を標したもの……高王観世音経

(6) 療病迎福などのための単なる迷信に類するもの

と分類し、その典型的疑経典について論証される。[5]もとより疑経典によっては単純に一思想のみを強調しただけにはとどまらず、前の分類で再出された例で知られるように諸思想の数種を包括した形態もあるわけで、この範疇に限って制限さるべきではないが、以上の論考を通して疑経典の諸思想の大略を知ることができるであろう。

それでは、このような総合的分析の中において、浄土教関係疑経典はどの範疇に類するものが多いであろうか。ここでその一、二について知っておこう。望月博士の指摘した弥陀関係疑経典を論外としても、なお教義・信仰に属する疑経典に多く認められる点がある。これは何らかの他の思想と併信の形で信仰されたことを意味する。若しその他の思想が従来の漢訳真経では認められない形態であったら、どうであろうか。それを浄土教関係疑経典の独自の思想形態と見做すことは後に立証されるであろう。[6]次に両研究に共通している点として、時の主権者に関する疑経典に浄土思想は認められない点がある。その代表的経典として仁王経、梵網経などを知っているが、そこには浄土思想は認められない。浄土思想の内容がこうした経典の思想に援引できない性格のものと考えられよう。そ

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

れとは逆に両研究では、伝統思想との調和を指摘している。とくに、道教の増寿説、或いは俗信としての護符的意義の疑経典に認められることを知れば、浄土教の庶民性、大衆性に気づくであろう。また、われわれは、増寿・護符的効用から浄土教の主仏、無量寿・阿弥陀の名称が関係することを後に知るであろう。

創作意図を異にし、思想形態を異にする多くの疑経典の中で、浄土思想はその意に適った形で援用され改変されたと思われるが、その具体的形態については次節で考究しよう。

(1) 〈資料篇〉pp. 111—113

(2) 望月信亨『仏教経典成立史論』pp. 339—359。

ただし、博士の論及は諸思想を明瞭に分類して列記されたのではなく、疑偽経論の総説の中で指摘されたものである。従って、ここでは取意抄出の形をとった。該当する疑経典は本稿で取扱うものに限った。なお〈資料篇(pp. 112)〉では、日本撰述浄土教関係疑経典も含めたが、ここでは省いた。

(3) その他、各章において考究された疑経典としては（望月博士、前掲書)、

道教及び俗信関係の疑偽経……浄度三昧経、十往生経、薬師瑠璃経、大灌頂経（pp. 404—424）

如来蔵并に密教関係の疑偽経……占察経、大仏頂首楞厳経、千臂千鉢曼殊室利経（pp. 485—509、519—531）

が詳述されている。

(4) 牧田諦亮「中国仏教における疑経研究序説」五、疑経撰述の意義（『東方学報』京都 第35冊 pp. 366—387)。博士はそれぞれの事例として何経かを挙げ、具体的に撰述の背景とその流伝を考証されるが、ここでは浄土思想に言及する当該経典のみ挙げた。

なお、〈資料篇〉疑経研究の紹介(p. 112)では、矢吹慶輝博士の業績を指摘したが、思想そのものに論及した個所が少ないために、ここでは省略する。とくに浄土思想に関する論述は『鳴沙余韻解説』(II. pp. 116—118）がある。

(5) その他の本稿の思想に関係する論及としては、道綽の引証疑経典（前掲論文、pp. 344—345)、護符的な意義……勧善経、新菩薩経（p. 387)、道教の増寿益算……浄度三昧経、続命経（pp. 388—389)などがある。

(6) 第四節第三項 pp.122—123。

第四節 浄土教関係疑経典の思想形態

第一項 〈一覧表〉よりみた全体的特徴

前節までにおいて、われわれは浄土教関係漢訳経論、中国浄土教、そして疑経典に認められる思想形態の大要を理解した。それでは、こうした様々な思想形態を背景として、浄土教関係疑経典はこれらの思想とどのように係わり、また独自の思想としては何が表われているのであろうか。本研究において、諸資料の検索と考証が第一の意図であるとしたら、第二の意図、思想形態の諸様相について考察を進めていこう。

そこで、まず最初になさねばならない、というよりは浄土教関係疑経典のすべてを漠然と前にしているとき、諸資料自体が自ら示唆してくれる全体的特徴の何点かについて論及しよう。

まず、この〈一覧表〉を疑経研究全般の立場から鳥瞰するとき、第一には浄土思想に言及する疑経典の極めて多いことが実感として感じられる。現存疑経典の実数がどのくらいであるのか、そのおおよそも知られず、[1]また本稿での浄土教関係疑経典のみならず、比較的多いと思われる観音関係、弥勒関係疑経典などの総数も寡聞にして聞いていないので、[2]その割合を計る目安はない。試みに、本稿でも多大な裨益をうけた牧田諦亮博士の敦煌出土疑経典の索引によると 152 経が挙げられ、その中浄土教に関係するのは33経である。[3]更に本稿で新たに取扱ったものは25経であるから、数部の重複を差引いても極めて多いことが判明する。藤田宏達博士〈一覧表〉による浄土思想に言及する

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

漢訳経論の場合、大乗の経論およそ1350部中の 290部、約5分の1強になるから、[4]それに較べても割合では疑経典の方がはるかに浄土思想に言及していることになる。これをもってしても如何に浄土思想に言及する疑経典が多いか知られるであろう。古人の〝諸教の讃ずるところ、多く弥陀に在り〟[5]の言葉は疑経典においても生きている。しかも疑経典であるがゆえに、中国の時代社会に浄土教が如何に浸透していたかが諒解されよう。

ところで、これらの疑経典に認められる浄土思想の比重を、経典の構成上からみると、浄土思想を主要として創作された疑経典が極めて少ないという第二の特徴が指摘される。本稿で指摘した浄土思想を主要とした疑経典は六部であるが、阿弥陀仏国への十往生法を中心に構成されている『山海慧菩薩経』『十往生経』の広略二本はまさしくこの範疇に値いするにしても、『阿弥陀仏説呪』2本については真偽が定め難いし、『念仏超脱輪廻捷径経』『極楽願文』は願文、讃文の範疇に属し、経典といい難い。したがって、6部のうち4部はいずれも厳密な意味で経典として扱うには問題があり、そうすると残り僅か2部、それも同種の異本ということになる。この点を日本撰述浄土教関係疑経典に比較すると、その特徴は一層顕著になる。本稿では、日本撰述と見做される疑経典として14部[6]を摘出したが、その中、5部は浄土思想を中心に構成された疑経典である。即ち、14分の5の比率であるのに対して、中国撰述として取扱った疑経典の総数は55部であるから、その比率は殆んど無いといってもよいであろう。また、この特徴を逆に解せば、一部に浄土思想の認められる疑経典が圧倒的に多いということになる。そしてこの点から言えることは、中国仏教全体の中で浄土教は疑経典をそれだけで創作する程の力はなかったが、しかし浄土信仰そのものは社会において幅広く信奉されていたことを意味するであろう。

このように浄土思想を主要とした疑経典が極めて少ないという特徴に関連して、第三に指摘される点としては、所謂〈浄土三部経〉の影響が弱いという特徴が挙げられる。日本撰述浄土教関係疑経典をみるとき、われわれは経題、仮託された訳者、その思想内容のいずれからみても、〈浄土三部経〉を抜きにしては成り立ちえない強烈な影響力を容易に知ることができるが、[7]中国疑経典に関しては、浄土思想を主要として構成された唯一の〈十往生経〉についても〈浄土三部経〉の影響から創作されたものではなく、むしろ中国浄土教の多様性に相応する〈諸行往生(十種の往生法)〉に属する疑経典である。また、その他の疑経典をみても、われわれは経題からも、数少ない仮託された訳者についても全く〈浄土三部経〉の痕跡を読みとることはできない。しかし、このことは中国撰述疑経典に〈浄土三部経〉の影響が全くないというのではない。後に指摘するように[8]中国においても『無量寿経』『阿弥陀経』の明らかな転用の何例かを認めることができるが、日本撰述疑経典に与えた極めて大きい〈浄土三部経〉の影響力、更に広く言えば、日本浄土教における〈浄土三部経〉の比重に較べて、中国においては極めて少ないという点に一つの特徴を認めることができるであろう。

全体的特徴として気づく第四としては、菩薩と縁りのある経題が多い点である。試みにそうした題名を挙げてみると、

観音菩薩関係:観世音三昧経、高王観世音経、救苦観世音経、青頸観自在菩薩心陀羅尼経、金剛頂経瑜伽観自在如来修行法、観世音不空羂索王心神呪。

その他の菩薩:山海慧菩薩経、普賢菩薩説証明経、新菩薩経、地蔵菩薩経、普賢菩薩行願王品、普賢菩薩行願王経、曼殊室利千臂千鉢大教王経、弥勒所問経。

などを挙げることができる。更に内容的に関係する仏・菩薩などとしては、

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

八大菩薩～潅頂百結神王護身呪経、善王皇帝尊経
二菩薩～続命経、須弥四域経、須弥像図山経、十二遊経。
普広菩薩～随願往生経
薬師瑠璃光仏～潅頂抜除過罪生死得度経
諸仏諸菩薩～〈仏名経類〉
その他～大仏頂如来首楞厳経、大聖毘沙門天王経、大仏頂如来頂髻白蓋陀羅尼経、惟務三昧経（閻羅王）、閻羅王授記経。

が重要な役割で登場する。

これらの経名並びに内容を通して知られることは、疑経典に認められる浄土思想は菩薩信仰と非常に密接に係わって説かれていたという点である。もとよりこの特徴は疑経典独自のものというわけではなく、漢訳経論においても認められるが、[9]しかし全体的比率からみると疑経典の方が菩薩信仰と結びついて認められる傾向の多いことは納得できるであろう。また、浄土思想に限らず、疑経典全体の特徴としても観音関係、弥勒関係、地蔵関係、閻羅王関係、仏名疑経典の多いことは知られているが、[10]更にそうした菩薩信仰には浄土思想が密接な係わりを有することが全体的特徴として認められる。この点と一部に浄土思想の認められる疑経典が多い上述の特徴を勘案すれば、融合的性格を有することが予想される。そして、これら菩薩信仰と結びついた浄土思想の一々を調べると、そこには従来の漢訳経論、中国浄土教には認められない疑経典独自の様相が指摘される。この点については第三項で更に論及しよう。

〈一覧表〉よりみた全体的特徴として、表面的にみただけでも以上の点に気づくが、これを少し詳しく仏名・仏国土名などの関係用語について考えてみると、仏名と国土名を比較して極楽（安楽）などの国土名が極めて少なく、仏名、それも「阿弥陀」「無量寿」の名称が圧倒的に多いという第五の特徴が指摘される。この特徴に関する要因としては何点かが考えられるが、ここでは巨視的にとらえた場合の二、三を挙げよう。まず第一の常識的理解として、阿弥陀仏信仰に較べて、その仏の現在する極楽往生信仰が同等の力で浸透していなかった点が挙げられよう。[11]しかしながら、この傾向も疑経典独自の形態というのではない。前に考察した浄土教関係漢訳経論、或いは藤田博士〈一覧表〉によるその他の経論をみても[12]国土名が少ないから、この特徴は浄土教関係経論の全体的特徴と考えるべきであろうが、とくに疑経典の方がこの傾向が強いのである。浄土に言及する疑経典は十四経（西方の語、欠本経も含む）、浄土のみを記述する疑経典に至っては『潅頂百結神王護身呪経』「西方往生」、『地蔵菩薩経』「極楽」など極めて少ない。従って第一の要因として全体的に阿弥陀仏信仰が強く、極楽浄土信仰が極めて弱かったことが予測される。第二に、仏名、それも「阿弥陀仏」「無量寿仏」の用語が圧倒的に多いという理由については、検索の際の査定に問題がある。浄土教の主仏、阿弥陀仏の原語はAmitāyus（無量寿）、Amitābha（無量光）の二つであり、漢訳される場合は音訳語としての阿弥陀、意訳語としての無量寿、無量光であるということを知っている。[13]しかし、実際に阿弥陀仏名を記述する諸経論を調べてみると、疑経典に限らず、無量光で査定された阿弥陀仏の資料が極めて少ない。即ち、今日知られている藤田博士〈一覧表〉、並びに本稿で査定した疑経典〈一覧表〉をみると「阿弥陀」「無量寿」の語が圧倒的に多いわけである。この最も大きな理由としては、無量光仏が阿弥陀仏を明確に示すことを立証する決め手がないことが挙げられよう。われわれは、無量光の原語としてAmitābha（Ḥod-dpag med）であることを知っていても、漢訳経論

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

の場合にその梵蔵本がなければ原語を確認することはできないし、無量光と訳された仏名を認めても、その原語が全く別な可能性を有するからである。[14]従って漢訳経論に認められる無量光仏のことごとくが阿弥陀仏を示すとは規定できないのである。[15]それに対して、阿弥陀・無量寿と漢訳された場合、極めて少ない例外を除いて、[16]浄土教の主仏を示すことは誤りがないであろう。訳語に関してはインド浄土教の研究にとって重要であるが、中国浄土教の基礎的資料として考えれば、また別な配慮が必要となる。中国仏教徒にとっては、その原語を知って阿弥陀仏信仰を抱いたのではなく、その原語とは係わりなく阿弥陀・無量寿・無量光という仏名が説かれれば、浄土思想と見做したことが充分に考えられるのであり、こうした諸例についてはすでに考究したとおりである。[17]以上のように「無量光」の用例が少ない理由として検索の際の査定に難点があることが考えられるわけである。全体的特徴の第四として指摘した仏名、それも「阿弥陀」「無量寿」の用語が多く、「無量光」、「極楽」などの国土名が極めて少ない点について、第一に阿弥陀仏信仰の優位性、第二に訳語の問題を取上げた。更に第三の要因としては、中国人の思惟方法として「阿弥陀」「無量寿」の言葉が好んで用いられたという点を挙げなければならないであろう。とくに疑経典においてはその創作者たちにとって最も好んだ言葉が用いられるわけであるから、中国人の思惟方法には考慮すべきである。この場合、中国人にとって全く意味を持たない呪術力な力を持つ「阿弥陀」[18]、或いは代表的中国思想の一つである神仙思想の長生不死と相応する「無量寿」の言葉が、おそらく非常に好まれたということは容易に予想されるであろう。われわれは中国思想全体の特徴として、こうした傾向のあることをすでに諸論考を通して教えられている。[19]

以上、中国撰述浄土教関係疑経典の全体的特徴の諸点について考察した。このような特徴が若し妥当であるなら、われわれはそれが中国浄土教、更には中国思想の全体的傾向と実によく相応していることに気づくであろう。まず、浄土思想に言及する疑経典が極めて多いにも拘わらず、浄土思想を主要として構成された疑経典は殆んどなく、一部分に認められる疑経典の圧倒的に多い点と、〈浄土三部経〉の影響が日本撰述疑経典に較べて極めて少ないという特徴は、中国浄土教の比重が中国仏教全体の中では、それを中心とした疑経典ができる程際立ったものではなかった。しかし、阿弥陀仏信仰そのものは社会において非常に幅広く信奉されていた。次に、阿弥陀仏信仰が極楽往生信仰へと結びつかず、「阿弥陀」「無量寿」の用語の多いという点は現実的傾向の強い、呪術的、不死を願う中国思想と相応することが考えられた。これらの諸点は漢訳真経にも共通していたが、とくに疑経典に顕著であったことは、おそらくその創作者たちは教理的に、或いは意図的に作り上げたのではなく、社会的要請、大衆の側に立った素朴な願望として現われたものとして忘れてはならないであろう。これら全体的特徴の何点かについては、更に具体的思想形態を論及することにより立証されるであろう。

(1) 従来の疑経研究において、経録の部数には論及しても、現存疑経典の総数を指摘したものは認められないようである。小野玄妙『仏教経典総論』(『仏書解説大辞典』巻十二、pp. 468—469)には103経を挙げるが、今日でははるかに多く基準になり難い。

(2) 望月信亨『仏教経典成立史論』(pp. 352—355) では、弥陀関係9経、観音関係11経、弥勒関係11経などを挙げるが、日本撰述も含む代表的疑経典で目安にならない。

(3) 牧田諦亮「中国仏教における疑経研究序説」(『東方学報』京都 第35冊)〔本論文中の疑経索引〕。
ただし、同一経典を名称によって再出(たとえば、灌頂経、灌頂抜除過罪生死得度経、薬師瑠璃光経、十方随願往生経、随願経など)、或いは論疏(たとえば、大乗起信論、武后登極讖疏など)も含まれるから、実数は異なる。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

本稿での疑経典も同様に数えた。

(4) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 136—161、とくにp.138。

(5) 『止観輔行弘決』巻二 湛然（大正46・182下）。

(6) 〈資料篇〉pp. 141—145、本号第一章第一節pp. 79—80。なお、日本撰述浄土教関係疑経典の思想形態については別に考察した。「日本撰述浄土教関係疑経典の諸思想」（古田紹欽編『日本仏教の社会的機能に関する基礎的研究』）。

(7) たとえば、経題として『九品往生陀羅尼経』『無量寿如来至真等正覚経』（〈無量寿経五存七欠〉の第三欠本経の題名）『四十八願阿弥陀経』、仮託された訳者としては東晋法力、曹魏康僧鎧、宋元嘉中畺良耶舎など、思想形態としては〈九品思想〉〈十二光仏〉〈法蔵菩薩〉『阿弥陀仏根本秘密神呪経』（『阿弥陀経』全文挿入）など。

(8) 第三項 pp. 121—122。

(9) たとえば〈無量寿経〉の対告衆は阿難から弥勒に代っている（*Sukhāvatīvyūha*, éd. par A. Ashikaga, p. 130、*ℓℓ.* 7 ff。『無量寿経』大正12・278 上以下、『大阿弥陀経』大正12・307 下以下、『平等覚経』大正12・289 中以下、『無量寿如来会』大正11・100 上以下、『無量寿荘厳経』大正12・325 中以下。ただし、この個所は構成上問題がある。藤田博士、前掲書、pp173—175）。

また、藤田博士〈一覧表〉の経名をみると『拔陂菩薩経』以下「菩薩」の語を用いる経典は50部程である。

(10) 望月博士、前掲書、pp. 352—355。

(11) ここで浄土思想を阿弥陀仏信仰と極楽浄土信仰の二つに分けることには異論もあろう。われわれが一般的に理解する概念は阿弥陀仏と極楽とは分離されるものではなく、〝かしこ〔極楽〕に、アミターユスと名づける如来、応供、正等覚者が、いま住し、とどまり、時を過ごし、そして法を説いておられる（tatra amitāyur nāma tathāgato ʼrhan samyaksambuddha etarhi tiṣṭhati dhriyate yāpayati dharmañ ca deśayati. *Sukhavatīvyūha*『梵蔵和英合璧浄土三部経』p. 196、*ℓℓ.* 3—5。『阿弥陀経』羅什訳、大正12・346 下。『称讃浄土仏摂受経』玄奘訳、大正12・348 下。その他*Sukhāvatīvyūha* éd. par A. Ashikaga. p. 26、*ℓℓ.* 13—15、〈無量寿経〉大正11・95下、同12・270 上、321 下、なお、藤田宏達『梵文和訳無量寿経・阿弥陀経』pp. 81、158、206参照）〟の文で代表されるように不離の形で考えているからである。従って、別な表現をすれば阿弥陀仏信仰があり、その浄土としての極楽思想が附随しているというべきかも知れない。この表現では極楽浄土信仰は当然のことながら少ない傾向にあることは納得できる。いずれにせよ、仏とその浄土は分離できないものである。しかし、ここで強いて二つに分けて解釈するのは、阿弥陀仏信仰が極楽思想と結びつかない事例、単に独自に説かれるだけでなく、阿弥陀仏信仰による極楽往生以外の果報、或いは他の仏、菩薩信仰による極楽往生信仰の事例を認めるためであり、この場合には分けた方が理解を容易にするからである。このことは第二・三項で納得するであろう。

(12) 第一節(pp. 98—101)で扱った具体的記述をみれば浄土に関する教説の少ないことは納得できよう。

藤田博士〈一覧表〉では仏国土名の頻出数は不明であるが、290部のうち、仏名と仏国土名記載 142 部、仏名のみ 109 部、仏国土名のみ39部である。よって仏国土名記載の少ないことが知られよう。

(13) しかし、それ以外の訳語例が全くないわけではない。藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 287—306、拙稿「菩提流支訳『仏名経』の構成について」（『印仏研』第24巻第1号）。

(14) 仏名には光明で表わされることが多く、その中には無量光と訳しうる原語もある。たとえば、Amitaprabha, Amitaprabhāsa, Asamāptaprabha, *Sukhāvatīvyūha*,（éd. par A. Ashikaga, p. 27、*ℓℓ.* 15—16、p. 47、*ℓ.* 4, p. 61、*ℓ.* 13）など所謂〈無量寿経〉十二光仏の異称を含む仏名であるが、若しこれらの仏名が別な個所に出ていたとしたら、「無量光」と訳す可能性もある。『無量寿荘厳経』ではAmitaprabha（*Sukh.* p. 61、*ℓℓ.* 13）を「無量光」（大正12・325 下）と訳す。

(15) その顕著な例として数千の仏名を列記する〈仏名経〉が挙げられるであろう。

(16) たとえば、『無量寿宗要経』の主仏はAparimitāyus（無量寿）であり、『陀隣尼鉢経』の「阿弥陀」（大正21・865 中、Tibet 本：ḥod-dpag med、異本：無量光など）は菩薩を指す。〈資料篇〉pp. 115—117参照。

(17) 〈資料篇〉pp. 110—118、本号第二章pp. 84、86。

(18) たとえば「弥陀」の用語は原語から考えれば全く逆の意味になる。

(19) たとえば、津田左右吉『シナ仏教の研究』pp. 53以下、中村元『東洋人の思惟方法』選集第二巻、pp. 124以下、など。更に塚本善隆博士は造像銘の調査より、「無量寿から阿弥陀へ」の変遷を論証された（「竜門石窟に現れたる北魏仏教」『塚本善隆著作集』第二巻、とくに pp. 436以下）。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

第二項 各疑経典の諸思想

前項において中国撰述浄土教関係疑経典の全体的特徴について理解したが、それではこれらの資料に認められた浄土思想は具体的に何であり、その中でもとくに強調されていた思想は何であろうか。或いは疑経典において初めて認められる独自の浄土思想は何であろうか。本項では、まずその一々について取上げ、それから導かれた諸問題について考察してみよう。

そこでまず各疑経典の具体的記述内容であるが、細かな当該文章についてはすでに〈資料篇(pp. 119—141)〉において指摘したので列挙する要はないであろう。むしろ、ここでは具体的思想形態を容易に知るために、かつて経典を中心として取上げた諸資料を今一度思想形態を中心として再構成し、その取意を示すことにしょう。(1)

〈阿弥陀仏信仰と往生信仰〉

十往生法～往生仏国 正念観仏・見仏～仏現前 見仏士荘厳 信是経、念仏～二十五菩薩擁護	十往生経 山海慧菩薩経
仏説呪～往生	阿弥陀仏説呪、無量寿仏説往生浄土呪
仏讃、南無極楽、南無阿弥陀仏、発願頌	念仏超脱輪廻捷径経
仏前敬礼、極楽願文	極楽願文
如西方無量寿国 願生阿弥陀仏国者、憶念七日、菩薩来迎	抜除過罪生死得度経
読誦～現世安吉、将来往生無量寿国	護身命経
観阿弥陀仏～願生無量寿仏国	観仏
陀羅尼神呪……南無阿弥陀仏 無量寿仏観世音、拯済有縁 託生無量寿 敬礼阿弥陀仏、稽首阿弥陀仏	普賢菩薩説証明経
『無量寿経』仏・菩薩 往生無量寿	大通方広経
六方三十八仏……無量寿如来 至心願生阿弥陀仏国	現在十方千五百仏名並雑仏同号 (出阿弥陀讃一切諸仏所持之法経)
受持読誦、奉持修行～定生極楽 念阿弥陀仏国 楽生西方国	無量大慈教経
無量光、十二如来、超日月光～教我念仏三昧 憶仏念仏～必定見仏 摂念仏人帰於浄土 弥陀、阿弥陀婆耶、無量寿仏	大仏頂首楞厳経
勤誦経、無量寿国、得生彼国	救苦観世音経
発普賢願、見阿弥陀 命終時、観弥陀、遊極楽 極楽殊麗、生蓮華中、親於弥陀	大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品 普賢菩薩行願王経
修入妙観理趣浄土門 西方無量寿世界 観極楽浄土、弥陀法身浄土、阿弥陀観自在王如来法身聖惟浄土観	大乗瑜伽金剛性海曼珠室利千臂千鉢 大教王経
受持読誦解説、恭敬供養、往生極楽界阿弥陀仏国	観世音不空羂索王心神咒功徳法門名不空成就法
南無阿弥陀如来、 阿弥陀仏往生浄土真言、唵阿弥陀婆耶、南	北方大聖毗沙門天王経

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

無阿弥陀穉遮耶	
敬礼阿弥陀如来、命終極楽国	大仏頂如来頂髻白蓋陀羅尼神咒経
欲生阿弥陀仏国者、憶念昼夜七日	善王皇帝尊経
八菩薩来迎、到西方阿弥陀仏国	善王皇帝尊経
無量寿国易往易取	目連所問経
作仏形像、得生無量寿国	優填王作仏形像経
阿弥陀仏功徳利益、十念、往生安楽国土	弥勒所問経
※専意誦念、得生彼仏浄国	占察経
※念阿弥陀仏、往生浄土	十王生七経
※念仏持戒、往生浄土	守護国界経
阿弥陀仏信仰	
讃歎阿弥陀刹	随願往生十方浄土経
専念読誦（是）経～見西方無量寿国	観世音三昧経
礼無量寿仏	救疾経
常念弥陀	太子讃
『無量寿経』仏・尊者	仏名経三十巻
南無弥陀仏	高王観世音経
誦此一仏二菩薩名（阿弥陀仏・観世音菩薩・大勢至菩薩）者、離生死苦、永不入地獄、	続命経
如阿弥陀仏無量寿国	三厨経
恒念阿弥陀仏～見仏	三厨経
念阿弥陀仏	勧善経、新菩薩経
化無量寿仏	青頸観自在菩薩心陀羅尼経
頂礼観自在王如来（即弥陀）	金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法
阿密嘌覩、無量光	金剛頂経瑜伽観自在王如来修行法
南無阿弥陀仏	相好経
讃歎阿弥陀仏、即向西方	善信磨祝経
阿弥陀仏遣二菩薩……諸天人民稽首阿弥陀仏	須弥四域経、須弥像図山経、十二遊経
弥陀仏先我四劫得道	空行三昧経
※受持斎戒・善神護念	浄度三昧経
往生信仰	
菩薩来迎、往生西方	百結神王護身呪経
現居安楽国、	究意大悲経巻二
（地蔵菩薩）造像、写経、念名～往生極楽	地蔵菩薩経
当生極楽	消灾除横灌頂延命真言経
持戒念仏功徳生第三炎天	惟務三昧経
生西方	舎利弗生西方経、生西方斎経

以上が、疑経典に認められる浄土思想の具体的な諸形態の略出である。そこで、これら様々な思想形態をより容易に知るために、浄土教関係経論の例に倣って、その用例に限ってまとめてみると、

○阿弥陀仏への念仏、正念、観仏、南無仏、憶仏、専念、誦仏（菩薩）名、常念、十念などによる往生、得益

○阿弥陀仏への十往生行、見仏、観察、讃嘆、敬礼、受持修行、発願、恭敬供養、造像持戒、写経、頂礼などによる往生、得益

○真言、陀羅尼を説く阿弥陀仏

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

○真言、陀羅尼中に表われる阿弥陀仏
○四仏、五仏、化仏、諸仏中の阿弥陀仏
○阿弥陀仏、(観音勢至) 菩薩の来迎、擁護、拯済
○見 (観) 極楽、南無極楽
○譬えとしての西方阿弥陀仏国

などになる。そして、これらの記述をみるとき、われわれは実に明快に何点かの思想的特徴を認めることができるであろう。

以下の考察においては、まず前節までに理解した従来の見解、とくに浄土教関係経論並びに中国浄土教の思想形態と相応させながら、そこに認められた様々な思想形態と共通する諸点に考究し、それらと全く性格を異にする思想形態、或いは明らかな転用の形態、即ち疑経典独自の浄土思想については次項で論及することにしたい。

そこで、まず第一に、これら各疑経典の具体的思想形態を列記してみて、全体的に強く感じた印象としては、阿弥陀仏に対する念仏、或いはそれに類する信仰が極めて多いという点が指摘される。上にまとめた第一の項目がそれに当るが、更に陀羅尼などに現われる阿弥陀仏はみな読誦されるから、それを加味すると阿弥陀仏への念仏思想が最も多いという印象を受ける。そこで、それを納得させるために、前のまとめでは用例だけに限った念仏に類する記述の一々を煩を嫌わず列記してみよう。(2)

念阿弥陀仏～7、南無阿弥多婆夜〔耶〕～3、南無阿弥陀仏～11、讃嘆阿弥陀仏～3、憶念昼夜～2、観阿弥陀仏、念弥陀、〈仏名経〉の阿弥陀・無量寿・無量光仏、誦阿弥陀仏、憶仏念仏

など、実に50個所を超えて認められる。更に記述の中では、たとえば『救疾経』「日々礼無量寿仏」、『勧善経』『新菩薩経』の「毎日念阿弥陀仏一千口」の経文、或いは『太子讃』『相好経』に附加された「弥陀和」「三称南無阿弥陀仏」の唱和(3)などの具体的数量を知ると、われわれは浄土思想に関する様々な形態の中でも念仏が最も強調されていたことを認めるであろう。更に、この念仏の強調を支持する傍証として、われわれは今一度浄土思想と見做された真経、疑経典の内容に注意すべきである。すでに論証したごとく、(4)具体的には浄土思想に言及していないにもかかわらず、中国浄土教典籍にしばしば引証され、浄土思想と解釈され見做された真経・疑経典の特徴はいずれも念仏思想に大きな比重がかかっていた。このような諸事例を知るとき、われわれは庶民信仰の表われとして創作された浄土教関係疑経典の思想的特徴として、第一に念仏思想が強調され、それがそのまま中国浄土教の最も主要な中心思想とよく合致している点を指摘できるであろう。

それでは、中国撰述浄土教関係疑経典の思想形態において、大きな特徴は念仏思想だけであったろうか。矛盾した云い方だが、念仏思想が強調されているのとほぼ同じ位にまた様々な行業による救済も認められるのである。第二の特徴として諸行思想を指摘しよう。

その第一例として挙げられるのは、浄土思想を主要として構成された唯一の〈十往生経〉の行業が挙げられる。その十種の実践を示すと、(5)

一者、観身正念、常懐歓喜、以飲食衣服、施仏及僧、往生阿弥陀仏国。
二者、正念以甘妙良薬、施一病比丘及一切、往生阿弥陀仏国。
三者、正念不害一生命、慈悲於一切、往生阿弥陀仏国。
四者、正念従師所受戒、浄慧修梵行、常懐歓喜、往生阿弥陀仏国。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

五者、正念孝順於父母、敬奉於師長、不起憍曼心、往生阿弥陀仏国。
六者、正念往詣於僧坊、恭敬於塔寺、間瀾解一義、往生阿弥陀仏国。
七者、正念一日一夜中受持八斎戒、不破一、往生阿弥陀仏国。
八者、正念若能斎月斎日中遠離於房舎、常詣於善師、往生阿弥陀仏国。
九者、正念常能持浄戒、勧修於禅定、護法不悪口、若能如是、往生阿弥陀仏国。
十者、正念若於無上道、不起誹謗心、精進持浄戒、復教無智者流布是経法、教化無量衆生、如是諸人等悉皆得往生阿弥陀仏国。

この教説を読むとき、われわれは「施仏及僧」(布施)、「不害一生命」(不殺生)、「孝順於父母、敬奉於師長」(世福)、「往詣於僧坊」、「八斎戒」、「遠離於房舎」などの用語が出家者でなく、明らかに世俗信者の毎日の実践を示していることに気づく。おそらく本経撰述の背景には、出家者が世俗教化を意図したか、在俗者側の要請があったことを窺わせる。浄土思想を主要とした唯一の疑経典の中心思想が「正念……往生」とあっても、世俗社会での在俗者の実践を説いていることは浄土教の大衆性として評価すべきである。また、その全文を引証した道綽の見解も同様である。更にその他の事例として、

受持読誦（無量大慈教経）
誦経（救苦観世音経）
受持読誦解説、供養恭敬（観世音不空羂索王心神咒功徳法門）
敬礼仏（大仏頂如来頂髻白蓋陀羅尼神呪経）
作仏形像（優填王作仏形像経）
十念（弥勒所問経）
念仏持戒（守護国界経、惟務三昧経）
讃嘆（随願往生経、善信磨祝経）
受持斎戒(浄度三昧経)、
造像、写経、念〔地蔵菩薩〕名（地蔵菩薩経）

などがある。これらの諸例はたしかに念仏思想も多かったが、また様々な行業によって、往生なり得益が願われた社会での状況を映し出している。それではこうした特徴が疑経典独自の浄土思想かというとそうではない。すでに考察したように、浄土教関係経論或いは中国浄土教の代表的思想形態の中にも認められたことは第一、二節において知られたであろう。そしてこれらの様々な実践は、中国浄土教の多様性という特徴とよく相応するものであった。

ここにおいて、すでに所々で漠然と想定していた浄土教の中心概念〝阿弥陀仏への念仏などの行業による極楽往生の教え〟の中、阿弥陀仏・諸行思想が疑経典においても顕著に認められたことになる。しかしながら、前項で論及した如く極楽浄土・往生思想に関しては少しく事情は異なっていた。

そこで、前項で考察した特徴の第五、仏名と仏国土名の問題を今一度具体的諸例に照らして検討する必要が生じる。前項においては、仏国土名が極めて少なく、仏名それも「阿弥陀」「無量寿」の語が圧倒的に多い要因として、第1に極楽浄土信仰に対する阿弥陀仏信仰の優位性、第2に検索の際の訳語の問題、第3に中国人の思惟方法の三点に論及した。就中、訳語の問題は検索に関することで差当りここでは除外してよいであろう。それでは、残り二つの要因が具体的記述に照らして、より妥当性を確保できるであろうか。こゝで第三の特徴として、仏名と仏国土名について論及しよう。

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

まず、具体的経文を通して知られる第一は、仏国土名の記述が極めて少ない理由が全く極楽浄土信仰が稀薄なのではなく、本来「極楽」と書いてしかるべきところが「阿弥陀仏国」「無量寿仏国」という表現で記されていることである。この点は前項の中国人の思惟方法に妥当する。その諸例を挙げると、まず広略二本の〈十往生経〉では、

『十往生経』	『山海慧菩薩経』
宣説西方極楽世界……一切衆生往生極楽世界之法	
〔十往生法〕往生阿弥陀仏国	往生阿弥陀
彼阿弥陀仏国有何妙楽勝事、一切衆生皆願往生彼	彼阿弥陀仏国有何楽、一切衆生皆願生彼
正念観阿弥陀仏国	正念観阿弥陀国
即見阿弥陀仏国土	即見阿弥陀国
若有衆生深信是経念阿弥陀仏願往生者彼極楽世界阿弥陀仏……	
悉皆往生阿弥陀仏国	悉皆往生阿弥陀国

などが認められる。[6] これらの用語をみるとき、われわれはその前後の経文を知らなくとも国土名として「阿弥陀仏国」「阿弥陀国」と書かれていることを容易に知るであろう。更に同様の用例を挙げれば、

阿弥陀仏国 阿弥陀国〔刹〕 弥陀仏国	阿弥陀仏説呪、随願往生経、灌頂抜除過罪生死得度経、阿弥陀讃一切諸仏所持之法経、無量大慈教経、観世音不空羂索王心神呪、善王皇帝尊経
無量寿仏国 無量寿国 無量寿	観世音三昧経、護身命経、観経、普賢菩薩説証明経、大通方広経、三厨経、救苦観世音経、大乗瑜伽大教王経、目連所問経、優填王作仏形像経
彼国 西方 浄土	灌頂百結神王護身呪経、大仏頂如来首楞厳経、救苦観世音経、北方大聖毗沙門天王経、須弥像図山経、舎利弗生西方経、生西方斎経

などである。これらの用法をみれば、本来「極楽」とあってしかるべきところが「阿弥陀仏国」「無量寿仏国」或いは代名詞などで省略されていることが判る。これによると、極楽浄土思想がないのではなく、浄土の主仏名で表わされている例が圧倒的に多いのである。この点は「阿弥陀・無量寿」の言葉を好んだ中国人の思惟方法とまさしく一致する。ところで、この用例から導かれる二つの問題についても、われわれは注意すべきであろう。その第1は、仏名として「無量光」の用例が訳語の査定の難点から極めて少ないことに加えて、〈無量光仏土〉に類する国土名は全く認められない点である。[7] われわれはこの点から、中国人にとって阿弥陀仏名に関しては「阿弥陀・無量寿」の二つだけ、「無量光」については全く考えていなかったといいきってよいであろう。第2に、それでは国土名が〈仏名土〉で表わされていることによって、極楽浄土思想が顕著に強調されていると認めてよいかという点がある。その場合、前項の第1の要因、極楽浄土思想の稀薄性という指摘とは抵触する。この点については、なお前項の要因を支持すべきであろう。たしかに具体的記述を取上げることによって、極楽浄土思想の比重は大きくはなったが、それでもその稀薄性は指摘できると思われる。その事例は次に考察しよう。以上〈仏国土名〉の用法について、二つの点に注意した。ところで、浄土に関して阿弥陀仏名で表わされている用例が疑経典独自の傾向かというとそうではない。印度撰述漢訳経論をみても中国浄土教典籍においても同様の記述が認められるからである。[8] しかしながら、この傾向が疑経典においては、とくに顕著であったことは中国人の思惟方法からも

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

指摘できるであろう。

仏名と仏国土名に関する具体的記述を通して知られる第二の特徴は、すでに前項で触れた阿弥陀仏信仰が極楽往生信仰に直接結びついていないという点である。この点は前項での第1、3の要因と妥当する。たとえば、

西方無量寿仏弟子大慈観世音、此大菩薩与閻浮履地拯済有縁（『普賢菩薩説証明経』）

有能誦比一仏二菩薩名〔阿弥陀仏観世音菩薩得大勢至菩薩〕者、離生死苦永不入地獄（『続命経』）

持戒念仏功徳生第三炎天（『惟務三昧経』）(9)

爾時人民多生苦悩、於是阿弥陀仏遣二菩薩……、一切諸天人民尽共稽首阿弥陀仏（『須弥四域経』）

などの経文は、阿弥陀仏への念仏、持戒などによって、苦を離れ、他方の天への往生を説いている。少なくとも極楽浄土への往生は明記していない。更に『護身命経』『救疾経』『消災除横灌頂延命真言経』などの経題だけから判断しても、これらが創作される背景として長寿・救苦の加護、功徳、滅罪などの現実における直接的な御利益を期待するものであり、往生思想が認められてもあくまでも第二次的な色彩が強いのである。また、往生思想ではなく、見仏、観仏国で終っている諸例もそれを立証するであろう。

※二十五菩薩擁護（〈十往生経〉）

専念読誦すること七日、……、行人をして西方無量寿国を見せしめる（『観世音三昧経』）(10)

恒念阿弥陀仏、至一年必得見仏（『三厨経』）

憶仏念仏、現前当来必定見仏（『大仏頂如来首楞厳経』）

発普賢此行願、……、是人速見阿弥陀（『大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品』、『普賢菩薩行願王経』

※受持斎戒、善神護念（『浄度三昧経』）

などの経文は、いずれも様々な行業によって現世の功徳を最大の目的とし、長寿得益が強調されている。よしんば往生が説かれていても少しく前後を読めば現世での長寿、滅罪、得益にはるかに比重の大きいことが知られるであろう。これらの諸事例は、いずれも中国人にとって阿弥陀仏信仰がそのまま往生思想につながるものではなく、それが現実の生活での延命、得益といった直接的な御利益を願ったことを示している。そして、この特徴は疑経典全体においても顕著な傾向として指摘される点でもあった。(11)従って、阿弥陀仏信仰と往生思想とは、今のわれわれが自明の理としているような不離の形で結びついているのではなく、全く別個の信仰と考えていたことが指摘できよう。しかし、この点も疑経典独自の思想ではない。漢訳経論にも中国浄土教においても極めて重要な個所に説かれている。(12)ここでは中国人によって著わされた疑経典に顕著であることが容認されればよいわけである。

以上、仏名が多く、仏国土名が少ないという特徴から考えられる一、二の用例を考察した。それら要約すると、第1にわれわれが浄土教の中心概念として漠然と〝阿弥陀仏に対する念仏などの諸行による極楽浄土への往生の教え〟と考えているが、実際には阿弥陀仏信仰とその果としての極楽往生思想とは分けられるという点、第2に極楽という用語より、阿弥陀仏国、無量寿仏国という用語が好まれた点、第3に阿弥陀仏信仰により来世の問題よりも現実的利益などを期待した点、そしてこれらの諸点は前項で論述した二つの要因と妥当する点が論証できたと思われる。

具体的思想形態から知られた大きな特徴は以上の三点であるが、更に細かな点としては、われわ

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

れが浄土教関係疑経典の当該文章を再読して受ける印象として、所謂哲学的思弁的な教説が殆んど見受けられない点がある。それに値する経典としては『大乗瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経』の「妙観理趣浄土門」「阿弥陀観自在王如来法身聖性浄土観」の記述であろうが、[13]それ以外は非常に素朴な浄土思想が説かれている。しかし漢訳経論に説かれる浄土思想も、後の教判を考慮しないで読むならば、おおむね難解な記述は少ないから疑経典の特徴とは云えないが、疑経典によっては高度な教理で構成されているものもあり（たとえば『仁王般若経』『梵網経』など)、そこにも浄土思想は認められない。浄土教は高度な教理として受容されたのではなく、易しい教えとして庶民に信仰されたことも指摘できよう。

以上、具体的浄土思想を通して、第一に念仏思想の強調、第二に諸行思想の特徴、第三に仏名と仏国土名の問題について論述した。その要結はそれぞれの最後に指摘したので再説する必要はないであろう。ただわれわれがここでも銘記しなければならないのは、経典に認められる同じ浄土思想であっても、真経が印度からの思想を中国人にとって意に沿うように漢訳され教判されたのに対して、疑経典はその時代その社会に密着した実態を積極的に語っているという点であろう。

(1) 以下の記述については、取意略出の故におそらく難点もあるであろう。厳密には分類できないにしても、一応の基準として〈阿弥陀仏信仰と往生信仰〉の二思想を説いたもの、〈阿弥陀仏信仰〉を中心としたもの、〈往生信仰〉のみが説かれているもの、という順序で取挙げた。疑経典によっては、全文が浄土思想のもの、数個所に浄土思想の認められるもの、極く一部のみのもの、と経典全体での浄土思想の占める比重が異なるのであり、頻出度を勘案するため異なる思想は再出した。しかし、同一の思想（たとえば『仏名経』の阿弥陀仏、無量寿仏）はその頻出度までは示さない。また取意を示すことによる誤りを少なくするために、内容的には同じ意味（たとえば、念・南無など）でも一々取挙げた。2個所以上に浄土思想が認められ、その中の1個所でも阿弥陀仏信仰と往生信仰が認められれば、他の個所が〈阿弥陀仏信仰〉、〈往生信仰〉のみであっても〈阿弥陀信仰と往生信仰〉に入れた。

なお、極楽浄土の語の代りに、阿弥陀仏国、無量寿仏国で表わされている場合、「往生」の語があれば〈阿弥陀仏信仰と往生信仰〉、「見」・「念」の語であれば〈阿弥陀仏信仰〉の範疇に収めた。この点に関しては、後に論及する。

(2) 所謂〈宗学〉の立場では、念仏についても口称から観相・実相までの種々な解釈が要求されるが（たとえば、『諸家念仏集』〔『浄土宗全書』巻十五〕、藤原凌雪『念仏思想の研究』など)、疑経典に限ってはそこまでの必要はないであろう。

(3) 念仏の唱和は讃文の読誦にはよくみられることである。たとえば『浄土五会念仏誦経観行儀』(大正85・1244中以下)、塚本善隆『唐中期の浄土教』pp. 193以下参照。

(4) 〈資料篇〉pp. 104、118—119、139—141、145。

(5) 『十往生経』(卍続1・87・4）による。「十往生経の研究」(『三康文化研究所年報』第3号、pp. 303—304）参照。

(6) ここで注意すべきは、現存『十往生経』で3個所「極楽」の用語が認められるのに対して『山海慧菩薩経』には全くないという点であり、しかも最後の個所は〈二十五菩薩〉として極めて重要な思想である。中国浄土教に限っていえば、『安樂集』『往生礼讃』『観念法門』『釈浄土群疑論』『楽邦文類』など代表的典籍に引証されるが、いずれも『十往生経』の引文でありながら「極楽」の語は認められない。このことは中国浄土教家に依用された『十往生経』が現行『十往生経』に至るまでに何らかの改変がされたことを示している。〈十往生経〉広略二本の研究として佐藤成順・大南竜昇「十往生経の研究」(『三康文化研究所年報』第3号）が詳細であるが、この指摘は認められない。細かではあるが思想的に重要なその他の差異も認められ検討の余地がある。他日に期したい。

(7) 真経の場合も極めて少ないが、無いわけではない。「至無量光明土」(『無量清浄平等覚経』支婁迦讖訳　大正12・288下、ただし、梵本では、〝そして、アミタ・プラバの前に行って〔gatvā ca pūrvam Amitaprabhasya、*Sukh.* par A. Ashikaga. p. 47、ℓ. 4〕〟、漢訳諸本には無い)、「於極楽世界無量光仏土」(『顕無辺仏土功徳経』玄奘訳、大正10・591下、ただし異本では「阿弥陀仏刹」である。『華厳経』仏陀跋陀羅訳　大正9・589下、実叉難陀訳　大正10・241上)。

(8) たとえば、〈無量寿経　三輩往生〉には「往生阿弥陀仏国」(『大阿弥陀経』大正12・310上—下、その他極めて多い)、

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

「往生無量清浄仏国」(『無量清浄平等覚経』大正12・291下—293中、その他「阿弥陀仏国」も含めて、282下、283中、284下、289中下など)。ただし、梵本(op. cit. pp. 42、ℓ. 9 ff)では〝かの仏国土に〔tasmin buddhakṣetre〕〟で前記の訳にはならない。〈後期無量寿経〉はいずれも「彼国」「其国」「極楽」と訳す(大正 11・97下—98上、同12・272中下、323中下)。

漢訳経論の用例については第一節(pp. 98—101)参照。

以上の漢訳経論の場合、訳出者が原本をそのとおり訳したのではない、翻訳上の変容は注意すべきである(中村元『東洋人の思惟方法』第二巻、pp. 4—10、etc. 参照)。この点は本稿の研究分野を超えるから触れない。ただし、浄土教関係漢訳経論に限って云えば、本稿でもそのすべてを依拠した藤田博士〈一覧表〉について注意せねばならない点がある。当該〈一覧表〉では、仏名・仏土名の査定の際、「阿弥陀仏国」「無量寿仏国」とある記述は仏名の項に収められている(矢吹慶輝博士「漢訳浄土経論表」では土名に「無量寿国」の欄がある。しかし「阿弥陀国」はない。『阿弥陀仏の研究』pp. 450以下)。この〈一覧表〉だけで判断する場合、われわれは単純に仏名として認められていると解釈しやすいが、実際には仏名土である。藤田博士の研究は、初めに指摘した如く、インド浄土教の原始形態を究明したものであり、漢訳資料はサンスクリット本、チベット訳に較べて比重が弱いわけであるから良いにしても、若し漢訳経論の浄土思想を主題に研究するならば、中国的訳語の変容も含めた多少異なった分析が必要であろう。本稿の疑経典〈一覧表〉で仏名・仏国土名・関係用語を一項目に含めたのもこの理由による。

中国浄土教典籍の用例としては、「弥陀浄国」「無量寿国」「弥陀浄刹」「阿弥陀浄国」(『安楽集』大正47・4上、6中、9下、18下、19上、20中)。未だ精査していないが『浄土論註』『観経疏』などには、経典の引文の外ではあまり認められないようである。後の課題とする。

(9) 本経には阿弥陀・極楽の語は無いが、『安楽集』『観念法門』などに引証された浄土思想と見做された古佚経である。牧田諦亮「中国仏教における疑経研究序説」pp. 343—345参照。

(10) 本経の原本、京都博物館蔵守屋本未見。牧田博士、前掲論文p. 381に依った。敦煌写経には当該個所は欠いている

(11) 牧田博士、前掲論文pp. 386—388。

(12) その顕著な例として、『観無量寿経』〈下品上・中・下生者〉「称仏名故、除五〔八〕十億劫生死之罪」(大正12・345下—346上)、それを引証する『観念法門』〈滅罪増上縁〉(大正47・24下—25上、その他〈護念得長命増上縁、見仏増上縁〔同・25上—27上〕〉も同様である)が挙げられよう。

(13) 望月信亨『仏教経典成立史論』pp. 519—531。

第三項 疑経典独自の浄土思想

前項までにおいて、疑経典に認められる浄土思想の諸形態について、全体的特徴並びに具体的記述から知られた特徴について論述した。これらの諸点は従来の浄土教関係経論、或いは中国浄土教の思想の中にも認められるものであったが、とくに疑経典であるがゆえに時代社会の背景を知る特徴として考慮すべきことを注意した。それでは浄土教関係疑経典に認められる、疑経典ゆえの他の真経にも従来の中国浄土教にも認められない独自の思想形態は何であろうか。本項では思想形態を究明する最後の課題について考察し、本研究の一応の区切りとしよう。

そこで浄土教関係疑経典の独自の思想形態を探究する前に、それを証明する条件としての一、二の規定を考慮しよう。その第一は真経には認められない思想であること、或いは認められるとしたら明らかにその転用が納得されることが要求されよう。この場合、第一節で概観した浄土教関係経論の思想形態が参考になるのであろう。第二には中国浄土教の思想形態に認められないものでなければならない。中国浄土教の特徴は第二節で辿ったように念仏が中心であっても、それ以外の実に多種多様な様相を示していた。しかもなお，疑経典の独自の思想はこの条件に合致していなければならない。本章の考察の経過に従えば第三に疑経典全体との関係を考える必要がある。しかしながら、浄土教関係疑経典はあくまでも疑経典全体の中での一分野にすぎないのであり，この点では疑

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

経典全体の撰述意義、思想形態に抵触しない。むしろ、第三節で学んだ様々な性格、それ自体が疑経典独自の形態として重要なのであり、それを考慮して検討していくべきであろう。以上が本項で取扱う資料の条件である。ところでこうした条件に合致する思想が果して見出せるであろうか。すでに知られたように、浄土教関係経論並びに中国浄土教の思想形態を概観しただけでも、その多様性は充分すぎるほど認められた。そこにはわれわれが考えられる限りのすべての浄土思想が網羅されているといっても過言ではない。ここで再び今迄の論述の経過を辿りながら独自の思想形態について探求していこう。

疑経典独自の浄土思想として第一に挙げられる点は〈浄土三部経〉の明らかな影響、転用がある。本章第一、二節において、浄土思想に言及する経論は極めて多いけれども浄土思想を主要として構成された代表的経典は〈浄土三部経〉であり、中国浄土教においても〈浄土三部経〉という規定はなかったがやはり道綽・善導で重視された往生経典〈浄土三部経〉の比重が大きいことを知った。しかしまた〈浄土三部経〉の影響を日本浄土教の如くに過大評価していけないことも本節第一項で注意した。これまでの〈浄土三部経〉に対する以上の評価を知るとき、それでは具体的に疑経典にはどの程度の影響があったのかをまず考察する必要があろう。

その第一例としては『無量寿経』『阿弥陀経』の諸仏をそっくり転用した〈仏名経類〉の何経かが挙げられよう。本稿で取挙げた三部の仏名経についてみただけでも『大通方広経』『仏名経』三十巻の中には『無量寿経』康僧鎧訳の比丘・菩薩・過去五十三仏・十二光仏・十三仏が全く同一の訳語で列記されているし、『現在十方千五百仏名並雑仏同号』所引の「阿弥陀讃一切諸仏所持之法経」の三十八仏は、問題があるにしても『阿弥陀経』羅什訳〈六方段〉の諸仏に相応する何らかの経典の明らかな転用であることは少しく考察したとおりである。(1) 更に〈資料篇〉では一経として挙げなかったが、『十方千五百仏名経』失訳、『不思議功徳諸仏所護念経』失訳には『阿弥陀経』羅什訳の諸仏が明らかに転用されている。(2) これらの諸例は列記の順序・訳語まで一致するから『無量寿経』『阿弥陀経』の転用であり、それだけこの二経が〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉諸異本の中でも世に流布されていたことを物語っている。(3) 以上の諸仏の転用は固有名詞だけに容易に気づくが、第二例として〈浄土三部経〉の教説に相応する思想形態を抽出してみよう。

『十往生経』「十往生法」	『観無量寿経』(4)
	〈世福〉〈中品中生者〉
『念仏超脱輪廻捷径経』四十八願度衆生、九品咸登彼岸	『無量寿経』『観無量寿経』
『潅頂抜除過罪生死得度経』『善王皇帝尊経』憶念昼夜若一日二日……七日	『阿弥陀経』
『護身命経』如上輩者	『無量寿経』
『大仏頂如来首楞厳経』有仏出世名無量光、十二如来相継一劫、其最後身超日月光	『無量寿経』

などが挙げられる。これらの諸思想は諸仏名のように全く同じ訳語というわけではないから、或いは一部に牽強を怖れるが、一応〈浄土三部経〉の影響と考えてよいであろう。以上の諸例は日本撰述浄土教関係疑経典に較べるならば極めて僅少であるが、しかし中国撰述疑経典に全く認められないわけではない。〈浄土三部経〉の影響に関する第三点としては、むしろこうした細かな諸例より、具体的例証を示しえないけれど、全体的状況で判断される念仏思想に与えた影響が重要であろう。すでに考察した記述を総合して推定されることだが、代表的大乗経典には浄土教の中心概念である〝阿弥陀仏への念仏による往生〟の説示は稀薄であった。中国浄土教の大勢としては念仏思想が主流であった。他方、疑経典に認められる浄土思想のうちで最も顕著な形態は阿弥陀仏への念仏であ

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

った。こうした全体的状況判断に誤りがないとするなら、それぞれ立場を異にする分野から必然的に帰納される経典は〈浄土三部経〉ということになるであろう。敦煌文献に認められる写経状況,[5] 疑経典成立と共通の社会を語る在俗往生人の伝記[6]も〈浄土三部経〉受容を肯定する傍証となるであろう。

第二に指摘される点として、真経においては全く説かれず、また中国浄土教においても従来論及されない、或る場合にはむしろ対立関係にあった菩薩信仰による浄土思想がある。すでに第一項の全体的特徴で論及した如く、浄土思想の認められる疑経典には他の仏、菩薩信仰が多かったが、このことは浄土教が主体なのではなく、他の仏・菩薩が中心の思想の中で浄土思想も併せて信仰された融合的浄土教の性格を示している。この場合、われわれは中国人の思惟方法として折衷融合的傾向があり、中国仏教もその埒外ではなかったこと,[7] わけても慈愍三蔵慧日を祖とする中国浄土第三流の歴史が唐中期以降に現われ、宋代に入っては浄土教徒といえば天台系・律系・禅宗に属して兼修された融合的浄土教であったことを銘記すべきである。

その第一例として『地蔵菩薩経』に認められる次の経文が挙げられよう。

若有善男子善女人、造地蔵菩薩像、写地蔵菩薩経、及念地蔵菩薩名、此人定得往生西方極楽世界。

若有人、造地蔵菩薩像、……、此人定得往生西方極楽世界。此人捨命之日、地蔵菩薩親自来迎。

一般に、弥勒当来までの無仏時代に衆生を済度する、とくに地獄の衆生を救済することで信仰された地蔵菩薩は、『大方広十輪経』八巻失訳、『大乗大集地蔵十輪経』十巻玄奘訳、『地蔵菩薩本願経』二巻実叉難陀訳、そして『占察経』(疑経典) などに説かれているが、いずれも浄土思想は認められない。また、中国における地蔵信仰の歴史は、塚本善隆博士の研究によれば、隋・初唐から起こっているが、玄奘・実叉難陀訳が出てから盛んになり、造像銘は則天武后代(650～704年)に増加している。[8] しかし、中国浄土教典籍には浄土思想と解釈された『占察経』の引証はあっても、真経からの重要な引証はないようである。[9] それに対して、本経は地蔵菩薩が地獄にきて、造像・写経・念地蔵菩薩名の極楽往生を説く。明らかに疑経典独自の浄土思想である。更に留意すべき点としては、ここでは極楽が地獄と対比的に説かれる点である。仏教の常識からいえば、極楽浄土は六道輪廻を超脱した宗教的絶対的な悟りの楽土でなければならないが、地獄での惨状を強調することによって対比的に極楽浄土が欣求されることになる。一般庶民にとっては極めて説得力の強い形態である。第2に、地蔵菩薩がとくに地獄の衆生を教化することから閻羅王思想と結びつき、更には閻羅王思想が浄土思想と融合する可能性が生じる点である。地蔵信仰と『十王経』の関係についてはすでに塚本善隆博士が考証されたが,[10] われわれは浄土思想の認められない、唐中期以降に成立し唐末頃から流行した『閻羅王授記経』が浄土教徒によって念仏を入れて読誦された理由の一つをこれで知るであろう。

菩薩信仰と融合した疑経典独自の浄土思想を示す第二例としては『続命経』に認められる弥陀・弥勒信仰が挙げられよう。すでに矢吹慶輝博士によって考証されているが,[11] 本経には、

西方阿弥陀仏観世音菩薩得大勢至大菩薩、有能誦此一仏二菩薩名者、離生死苦永不入地獄……

(十願を説く)

総願当来値弥勒、連辟相持入化城。

と阿弥陀信仰と弥勒信仰が説かれている。前例に倣って、まず経典から調べると所謂〈弥勒六部経〉[12] には浄土思想は認められない。中国における弥勒信仰の歴史は、阿弥陀信仰と同じ浄土教の問題として種々論述されているが、魏晋南北朝時代には両者は混同されていたが、やがて仏教教学が盛ん

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

になるにつれてその優劣が論議され対立関係になり、後に阿弥陀信仰が大勢を占めるようになった。[13] 従って、われわれが造像銘にみえる初期の混同を除いて、仏教典籍から知る両信仰は絶えずその優劣難易、即ち対立関係にあった。しかしながら、本経で説く経文には阿弥陀仏信仰と弥勒信仰が並存している。続命を経題とする本経は現世での長寿を願う疑経典一般の特徴を有しているが、更にまた融合的浄土思想として従来知られない中国浄土教の隠された様相を示している。

以上の二経は、他の菩薩信仰との融合的浄土教を示す明らかな事例である。その他真経には浄土思想の認められない経典としては『北方大聖毗沙門天王経』(S.5560)がある。毗沙門天(Vaiśravaṇa, 多聞天) を題名とする経典には不空訳の『北方毘沙門天王隨軍護法儀軌』『北方毘沙門天王隨軍護法真言』『毘沙門儀軌』『北方毘沙門多聞宝蔵天王神妙陀羅尼別行儀軌』があるが、いずれにも浄土思想は認められない。本経での浄土思想は念仏 (南無阿弥陀如来補処観音菩薩大勢至菩薩) と阿弥陀仏往生浄土真言であり、その形態はいずれも密教経典には説かれるものであるから疑経典独自の浄土思想ではないが、[14] 毗沙門天信仰を主体にした経典の中に認められる浄土思想という点では独自の形態である。

以上、浄土思想が他の菩薩(仏、諸天など)の信仰の中で認められる全体的特徴から、とくに従来の経典、浄土教には認められない疑経典独自の思想形態について論究した。おそらく疑経典撰述者、或いはその信奉者たちは教理的に判釈することなく、その時代その社会で最も信仰された仏・菩薩たちを何ら対立させることなしに混合させ融合させ、独自の信仰形態を産み出したのであろう。そしてこの特徴は、中国人のすべてを融合する思惟方法、浄土教の融合的浄土教へと移っていった歴史ともまさに一致する点では当然の現象であったといえよう。

疑経典独自の浄土思想として第三に指摘される点は、厳密には経典として取扱うには注意を要する願文、讃文の経典化の問題である。[15]

これに該当する経典を挙げると、まず浄土思想を主要として構成された『念仏超脱輪廻捷径経』がある。その内容が『竜舒浄土文』王日休撰、増広部分からの讃文・発願頌で構成されていることは〈資料篇〉で指摘した。[16] 従って本経は讃文・頌が経典化したことになる。第二に『大方広仏華厳経普賢行願王品』『普賢菩薩行願王経』は『普賢菩薩行願讃』不空訳の転用である。これも讃文が疑経典になったことを示している。第三に太子讃経と査定した『太子讃』(S.2204) は目録では讃文に査定されている。[17] ここでは讃文が経典と見做されたことになる。第四に『三厨経』の偈文が『集諸経礼懺儀』智昇撰に集録されている。このことは偈文だけが別にしばしば誦えられていたことを示す。以上の諸例から知られることは、まず願文、讃文が経典になりうるという点である。これは疑経典成立の状況を推定する一つの手掛かりになる。次に、願文・讃文はそのままであっても経典と見做されうるという点である。これは浄土教に関係するすべての真経、疑経を研究対象とするわれわれにとって願文・讃文に認められる浄土思想も同様に研究しなければならないことを意味している。ここでそれを傍証する二、三の事例を挙げよう。まず第一は今日〈大正蔵経〉に収められる印度撰述 (厳密には問題がある) 三蔵には願文・讃文も含まれている点である。これは説明を要しないであろう。第二には経録において真経はもとより疑経典の中にも認められる点である。「衆経要攬法偈」「四讃偈及七仏名字礼懺経」など[18]の経題から予想される内容はおそらく偈文・讃文であろう。第三にはわれわれも経典と見做す点である。『太子讃』の査定がそれである。これらの諸例は、第一に仏教徒が自己の信仰を赤裸々に発露した願文なり讃嘆文が、時を経た後の人々によって経典

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

と見做される可能性を示している。第二に、とくに疑経典に共通する点として、おそらく疑経典が撰述される同じ意図で願文、讃文が著わされたのであり、同じ時代・社会を背景として生れたことに注意すべきである。この点では中国浄土教の実態を知る上での極めて重要な資料である。疑経典と願文・讃文の問題については、願文・讃文の検索を終えた後に別に再考することにし、[19]本稿ではその重要性を指摘するにとどめる。

疑経典独自の浄土思想として第四に、原始仏教の領域に含められる浄土思想がある。すでに前章第二節において、経録には小乗経典と査定された疑経典の中に浄土思想が認められることを論述したが、原始仏教では浄土教はありえないという今日の常識に外れた思想形態が見出せる。

その一例は『太子讃』である。太子出家の故事として伝えられる〈四門出遊〉の中に「北行見真僧;……常念弥陀転法輪。救度世間人……」と現われるが、当然のことながら大乗仏教になって登場する阿弥陀仏がその当時念ぜられる筈はない。その二例として「弥陀仏先我四劫得道、維衛仏先我三劫得道」(『空行三昧経』)の佚文がある。詳しくは判らないが、その前後の引証経典は『普曜経』『自誓三昧経』『善見律』で釈尊成道の年令に関して述べている。従って思想内容も引証経典も原始仏教に属すものである。以上の二例はいずれも釈尊の伝記の中で浄土思想に言及したものである。ただ当該経典二部は完本ではなく査定に難点があるから積極的な主張はできないが、今日浄土思想の認められる経論290部はことごとく大乗仏教に属し、思想的にも原始仏教に浄土思想が無いというのが定説[20]であるから、この二つの経文は極めて奇異な感じを与える。おそらく疑経典の撰述者たちにとってはその当時最もよく知られ信仰された主要な思想を融合して経典を構成したのであるから、大乗・小乗の区別なく釈尊の伝記に阿弥陀仏を取入れたと思われる。この点は第二の指摘、他仏・菩薩信仰に浄土思想が融合された特徴もその傍証になろう。こうした点を総合すると原始仏教的内容に浄土思想が認められる可能性は肯定してもよいであろう。

疑経典独自の浄土思想として四点について取上げ考察した。ここで最後にその他細かな一、二について指摘し本項を終えることにしよう。その一つとしては真経からの明らかな転用の諸例である。たとえば『大方広仏華厳経普賢菩薩行願王品』『普賢菩薩行願王経』が『普賢菩薩行願讃』不空訳に倣ってできた疑経典であることは前に述べた。浄土思想に限ってみれば不空訳と殆んど同じである。第二には、一連の密教経典に相応する疑経典がある。すでに望月信亨博士によって論証されている『大仏頂如来首楞厳経』『大乗瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経』、[21]〈資料篇(pp. 132—133)〉で少しく考察した『青頸観自在菩薩心陀羅尼経』、敦煌写経から新たに認められた『観世音不空羂索王心神呪功徳法門名不空成就法』『北方大聖毗沙門天王経』『大仏頂如来頂髻白蓋陀羅尼神呪経』などは〈資料篇〉で類似の経文を示したがいずれも密教経典の思想である。従ってその成立も一部を除いて不空・金剛智などの密教経典訳出以後ということは前章で論及したとおりである。ただここで、浄土思想の認められるこれら密教系疑経典で注意せねばならないことは、それ以外の疑経典に較べて決して平易な思想ではないという点である。それまでの比較的短い経典で素朴な浄土思想が認められたのに対して陀羅尼を含めて極めて難解な文字も用いられている。おそらく同じ疑経典とはいっても実社会の要請の中から現われたのではなく、密教経典をそのまま転用する形で作られたに違いない。通常、密教が宗教としての働きを帯びるのは空海による日本においてであって、中国においては経典訳出に特色があり教理的には大成しなかったとされているが、[22]こうした疑経典に転用され写経されている事実は社会での密教信奉者の存在を明らかに示している。しかしながら、浄土

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

教に限っていえば、資料的には認められるけれども、真経における多数の密教経典と同じように単に浄土思想が認められるにすぎないだけで、おそらく密教系浄土教徒は極めて少なかった[23]と云えるであろう。

以上、本研究の最後の課題である疑経典独自の浄土思想について論及した。疑経典が中国思想、仏教思想全体を背景として撰述され、また疑経典に認められる浄土思想が浄土教関係経論並びに中国浄土教を依りどころとして現われている以上、独自の思想形態の事例が少ないのは当然であろうが、しかし、上述の数例は従来殆んど知られていない、場合によっては対立関係にあるとされていた中国浄土教の新たな様相を示してくれた。われわれは中国浄土教について様々な問題を教えられているが、疑経典の撰述者、或いはそれを信奉した人々はおそらくそうした教判も教理も考慮することなく、時に応じ機に即した教えを疑経典に託したのである。その意味では、これらの事例は極めて僅かであるけれども、全く隠された浄土教、社会に即応した浄土思想として留意しなければならないであろう。

(1) 〈資料篇〉pp. 124—128、その後当該仏名については別に論究した。拙稿「『阿弥陀経』六方諸仏の異名」(『印仏研』第23巻第2号)。

(2) 『十方千五百仏名経』大正14・312中—318上、〈資料篇〉pp. 127、129。『不思議功徳諸仏所護念経』大正14・360下、363中、364上、藤田宏達『原始浄土思想の研究』pp. 220—221。

(3) 本稿はあくまでも浄土思想に限った論述であり、仏・菩薩も〈浄土三部経〉に限定したが、他の経典についても、たとえば『現在十方千五百仏名並雑仏同号』には『薬王薬上経』五十三仏、『決定毘尼経』三十五仏、『称揚諸仏功徳経』と中国社会に最も流行した〈仏名経類〉の諸仏名が収められているし、『仏名経』三十巻には『法華経』羅什訳などの諸仏も転用されている。疑経典としての〈仏名経〉は著名な諸経論の仏・菩薩を転用して構成されたのである。また、〈仏名経類〉については、こうした〈仏名疑経〉の研究の外に、真経の〈仏名経類〉にも多仏思想に係わる重要な問題がある。その一端は発表したがなお検討中である(拙稿「菩薩流支訳『仏名経』の構成について」『印仏研』第24巻第1号)。

(4) 「十往生法」の経文は前項(pp. 115-116)、『無量寿経』〈世福〉「孝養父母、奉事師長、慈心不殺」、〈中品中生者〉「若有衆生、若一日一夜〔受〕八戒斎、……、威儀不缺」(大正12・341下、345中)。世俗社会での行業として相応するので挙げた。なお、大南竜昇「十往生阿弥陀仏国経における十往生法の成立について」(『三康文化研究所年報』第3号)では、涅槃経、浄土経典、弥勒経典、十住毘婆沙論、智度論、梵網経からの相応文を列挙し、一経典から十法すべてに合致しないことより、極めて多様な性格をもつ実践徳目と結論する。

(5) 『敦煌遺書総目索引』(pp. 419、434) によれば『阿弥陀経』は140部程認められる(就中、スタイン本は46部である。井ノ口泰淳「敦煌本『阿弥陀経』について」『宗教研究』第177号)。『無量寿経』『観無量寿経』はそう多くはない。

(6) 往生伝には〈浄土三部経〉の影響が顕著である。小笠原宣秀『中国浄土教家の研究』pp. 142—143、146—148参照。

(7) 中村元『東洋人の思惟方法』第二巻pp. 212—232。

(8) 塚本善隆「竜門石窟に現われたる北魏仏教」(『塚本善隆著作集』第二巻pp. 436以下。なお、同「引路菩薩信仰と地獄十王信仰」『塚本善隆著作集』第七巻pp. 374—375参照)。

(9) このことは、〈地蔵経典〉が全く引証されていないというのではない。たとえば『釈浄土群疑論』巻七(大正47・73中)に認められるが具体的内容は不明である。

(10) 塚本善隆「引路菩薩信仰と地獄十王信仰」(『塚本善隆著作集』第七巻pp. 374—375)。

(11) 矢吹慶輝『三階教の研究』p. 657、同『鳴沙余韻解説』II. pp. 269—272。

(12) 『弥勒下生経』(竺法護訳)『弥勒下生成仏経』(羅什訳)『弥勒下生成仏経』(義浄訳)『弥勒大成仏経』(羅什訳)『弥勒来時経』(失訳)『弥勒上生経』(洹渠京声訳)。

(13) 松本文三郎『弥勒浄土論』、塚本善隆「竜門石窟に現われたる北魏仏教」(『塚本善隆著作集』第二巻pp. 436以下、)

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

藤堂恭俊『無量寿経論註の研究』pp.9—19、源弘之「新羅浄土教の特色」(『新羅仏教研究』) など。

(14) 浄土思想に言及する密教経典は135部、その中にも陀羅尼で説かれる浄土思想は極めて多い (pp.100—101)。当該文が何から転用したか未だ認めていない。

(15) 願文・讃文と疑経典の検討は思想形態を論ずる本章には妥当しない問題であるが、他に収めるべき章節がないのでここで扱うことにした。

(16) 〈資料篇〉pp.120—121。なお『竜舒浄土文』については小笠原宣秀「宋代の居士王日休と浄土教」(『結城教授頌寿記念仏教思想史論集』) 参照。

(17) 〈資料篇〉p.123—124、矢吹慶輝『鳴沙余韻』Ⅰ、pp.285—286、Ⅱ、pp.226—227、Giles-Manuscripts. p.236、『敦煌遺書総目索引』p.153、金岡照光編『敦煌出土文学文献分類目録附解説』p.62。

(18) 『出三蔵記集』巻五 (大正55・39中)、『武周録』巻一五 (大正55・474上)。また僧祐が疑撰とした「仏法有六義第一応知一巻、六通無礙六根浄業義門一巻」(『出三蔵記集』巻五、大正55・39中) は、『歴代三宝紀』巻十一、費長房撰では経としている (「仏法有六義第一応知経一巻、六通無礙六根浄業義門経一巻」大正49・96上)。

(19) 浄土思想に言及する敦煌文書 (ここでは仏教経律論疏を除く願文・讃文・講経文・変文などを意味する) の重要性についてはすでに関説したが (〈資料篇〉pp.101—102、本号pp.81、103—104)、ここで検索しおえたスタイン本の資料を挙げておく。

〔大正蔵第八十五巻所収〕

梁朝伝大士頌金剛経序 (1中)、『浄土五会念仏誦経観行儀』巻中・下、持斎念仏懺悔礼文 (1267中—1268中 ※原本S2443とあるもS2143)、道安法師念仏讃(1268下)、南天竺国菩提達摩禅師観門 (1270下)、大乗四斎日 (1299下—1300上)、地蔵菩薩十斎日 (1300上)、大目乾連冥間救母変文并図 (1313中)。

その他:

S522 消滅交念往生発願文、S1807西方浄土讃、S2565Verso1、S2566大悲啓請、S2579西方浄土讃擬、S2583Verso1、S2945浄土楽讃、S3427願文擬、S4175毎月逐日念仏名擬、S4378Verso1、大悲啓請、S4443維摩讃Verso1地蔵菩薩経十斎日、S4474西方讃文、S4732請四方仏文擬、S5551斎日行事擬、S5892地蔵菩薩経十斎日、S6109大乗浄土讃、S6631 1v.帰極楽去讃、3r.遊五台讃文 (なお題名は『敦煌遺書総目索引』参照、ただし一致しないのもある)。

(20) 藤田博士、前掲書、pp.222以下。

(21) 望月信亨『仏教経典成立史論』pp.493—509、519—531。

(22) 松長有慶『密教の歴史』pp.131—154、188—192。

(23) 拙稿「中国における密教系浄土思想」(『印仏研』第19巻第2号)。

要　結

以上、本章では浄土教関係疑経典の思想形態について論述した。

はじめに、疑経典に認められる浄土思想の解明を誤まらしめないために、浄土教関係経論、中国浄土教、そして疑経典全体の思想形態について概要を理解した。就中、浄土教関係漢訳経論については、今日最も権威ある典拠としては藤田宏達博士による「浄土思想に言及する〈一覧表〉」であるが、これはあくまでもインドにおける原始浄土思想の資料であり、中国浄土教研究の立場では漢訳としての変容、思想形態そのものまで考慮しなければならないことを注意し、中国仏教に大きな影響を与えた代表的大乗経論の浄土思想、次に多様な思想形態を説く何点かの経典からその具体的内容を窺った。漢訳経論を主とした総合的成果は未だ『阿弥陀仏説林』に依っている。ここで比較的紙数を割いたのもこうした今後の課題を考慮したためである。その結果、浄土教関係経論においては第一に代表的大乗経典には浄土教の中心概念とされる〝阿弥陀仏への念仏などによる極楽往生の教え〟は明確に説かれないこと、第二にその他の経典には多種多様な浄土思想は認められるが密

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

教経典に多く、従って比較的後に表われたことを認め、この両者から帰納される中国浄土教における主要な経典としてはやはり〈浄土三部経〉であることを理解した。中国浄土教の思想形態については、便宜的に〈中国浄土三流〉の特徴を辿り、とくに本稿に関係する事項に注意した。とりわけ依拠するところの極めて大きい敦煌文献に関しては残された課題を含めた何点かを指摘した。疑経典全体の思想形態については従来の研究から一、二を取上げ、以って全体的性格を学んだ。以上、従来の浄土教研究並びに疑経研究の大要を背景として、浄土教関係疑経典の思想形態を考究したが、まず第一項では、〈一覧表〉より知られる全体的特徴としては、第一に真経以上に疑経典には浄土思想が認められるが、しかし浄土思想を主要として構成された疑経典は極めて少なく、従って日本浄土教のように〈浄土三部経〉の影響に大きくないことを知った。第二に浄土思想の認められる疑経典には菩薩信仰を主としたものが多く、第一の点を勘案するとおそらく融合的性格を有することを予想した。第三に関係用語から知られる点として、国土名が少なく、仏名、それも「阿弥陀・無量寿」の多いことから、阿弥陀仏信仰の優位性、訳語の問題、そして中国人の思惟方法について論及した。こうした全体的特徴をふまえて、第二項では、具体的な思想内容を取上げたが、その結果、第一に念仏思想、第二に諸行思想を指摘し、いずれも中国浄土教の特徴と相応することを知った。しかしながら、浄土名については、1．仏名で現わされている点、2．現実的利益の特徴を認め、中国人の思考方法から現われたことを指摘した。第三項では、疑経典独自の浄土思想として、まず〈浄土三部経〉の影響を挙げ、更に従来の中国浄土教では知られていない融合的浄土教、願文・讃文との関係、原始仏教の領域に認められる浄土思想などについて論及した。

以上の論考で知られた諸点を一言で述べると、浄土教関係疑経典の思想形態は中国思想、中国浄土教の影響を顕著にうけながらも、なおその時・所に即応した独自の思想が説かれていたと言えるであろう。

結　　論

問題の所在で指摘したごとく、本稿の意図した課題は二つであった。第一は浄土思想に言及する広義の疑経典は如何程あるか、第二はそこに説かれる思想形態は何かという点である。

論述の経過と要旨を述べると、第一の意図を問題とした前号〈資料篇〉においては、まず〈浄土教関係疑経典〉の用語について規定し、本研究を遂行するための関係資料と従来の諸研究について取上げた。本研究に関係する従来の研究分野としては浄土経典を中心とする浄土教研究と中国撰述経論を中心とする疑経研究の二つがあり、両者を総合した形で帰納された資料〈浄土教関係経典〉として、㈠ 従来指摘されている真経、㈡ 中国以降に浄土思想と解訳された経典、㈢ インド撰述の疑わしい経典、が考えられた。就中、本研究の資料として㈢を中心としながら㈡に該当する経典についても指摘し、一々について諸先覚の研究に依拠しつつ考証したのが浄土教関係疑経典の分類である。その結果、疑経典といっても、明らかな偽経・真偽未詳の疑経典・浄土思想に関しては附加・挿入の経典、構成上からみると浄土思想を主要とした疑経典、一部分に浄土思想の認められる疑経典・古佚経・経録から予想される疑経典、更には浄土教に依用された疑経典……と実に様様な経典が知られた。

第二の意図を中心とした本号〈研究篇〉においては、まず〈資料篇〉で考證した諸資料の整理を

NII-Electronic Library Service

Sapporo Otani University & Junior College of Sapporo Otani University

行い、出典別特徴並びにそれに附随した二、三の問題に論及した。更に様々な性格を有する諸資料の取扱いを考え、その結果、中国撰述浄土教関係疑経典に限定して後の考察を意図することにした。そこでこれらの諸資料から知られる成立・写経年代であるが、その理解を誤らしめないために疑経典全体の傾向を経録と従来の諸研究から知り、そうした流れの中での浄土教関係疑経典の歴史を位置づけた。それぞれ性格も典拠も異なった諸資料を通して辿る歴史は、最初期の「道安録」の時代から十世紀に及んでいるが、大きく初唐代までのグループと唐中期以降とに分けられ、前者は従来の中国仏教資料に多く、後者は近年知られた敦煌写経が中心であるのを知った。その際、疑経典は或る時代或る社会の要請のもとで大衆と密着した形で現われること、またその受容者の態度などにも留意すべきことを二、三の立場を問題にして知られたであろう。思想形態については本研究の大きな課題として細かな内容まで穿鑿して考究したが、その要点は前の要結においてまとめた通りである。そこでは従来知られていた中国浄土教の特徴がより明らかに指摘されただけでなく、新たな様相も認められたであろう。

以上が本研究の経過と要旨であるが、最後に諸般の理由で本稿で論及できなかった二、三の点を今後の課題として取上げ、本研究をひとまず終えることとしたい。その第一は、当初今日披見しうる関係資料の検索を意図したわけであるが、なお調査すべき諸資料の存すること、また本稿で取扱った諸資料でも未だ不明な部分の有する点である。就中、敦煌北京本（東洋文庫影印）については検索中であるが、これらの諸点については今後も研鑽を続けて新たな解明を意図したい。第二は、各疑経典の中国社会における受容、変遷について総合的に論及できなかった点である。すでに重要な何経かについては諸論考が認められるが、なお取上げるべき疑経典が残されている。それを依用し信奉した人々を通して有余曲折した経過を辿りながら今日に伝えられた疑経典、とりわけ中国で創作され、一方は敦煌文献に、他方は日本へと異なった方向に伝えられ残された資料の比較検討は当該経典の位置づけを明らかにするだけでなく、その当時の社会の様相をより克明に物語ってくれるであろう。第三には、本研究を基点として知られた関係分野の諸問題が挙げられる。たとえば漢訳経典を主とした浄土思想の研究はインド浄土教の歴史に関与するだけでなく、中国における受容の問題の基礎的資料となるであろう。また、疑経典と共通の基盤で考えられる敦煌文書を主とした浄土思想の総合的研究は本研究に対して新たな手掛りを与えてくれるであろう。本稿における幾多の難点についてはなお推敲を続け、新たな課題についても更に考究につとめる所存である。

〔後書〕本研究は、浄土経典研究では北海道大学教授藤田宏達博士、疑経研究では京都大学教授牧田諦亮博士の研究にその多くを依拠している。とくに藤田宏達先生には種々御示教をいただいた。記して謝意を申し上げる次第である。

NII-Electronic Library Service